

平成26年度指定
スーパーグローバルハイスクール
研 究 報 告 書
【第4年次】

平成30年3月



学校法人 名城大学
名城大学附属高等学校

はじめに

学校長 岩 崎 政 次
IWASAKI Masaji

本校は 1926（大正 15）年に名古屋高等理工科講習所として開設され、2016（平成 28）年には開学 90 周年の節目を迎えました。戦後の新教育制度になってからは、普通科・商業科・電気科・機械科の 4 学科体制の男子校として新たに出発しました。その後、1999（平成 11）年に専門学科を総合学科に改組するとともに、普通科の一部を男女共学にし、段階を踏みながら 2004（平成 16）年に総合学科を男女共学にすることにより、全学の共学化が完了しました。2014（平成 26）年には、従来から国際クラスで行ってまいりました課題探究型学習や英語学習を発展させることにより、スーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受けることができました。

SGH 事業の中核をなす国際クラスは、2003（平成 15）年に名城大学の 8 番目の学部として人間学部が発足するのに合わせ、高大一貫 7 か年教育のパイロットケースとしてスタートしました。本クラスは、当初より、生きた英語力の獲得と異文化理解を目的とした「ニュージーランドでの修学旅行」、実用英語技能検定・TOEIC 等の「資格取得」、各自が設定したテーマに基づいた 8,000 字以上の「課題研究論文の作成と英語での発表」の 3 つを特色とし、7 年後を見通したキャリア教育を実践してまいりました。

SGH 指定により、「愛知県産業を基盤としたグローバルビジネス課題」を研究課題として課題探究活動の一層の深化を目指しています。初年度の 2014（平成 26）年度には、開発と環境、協働・共生、といったグローバル課題をテーマに実施したインドネシアやアメリカでの「海外研修」、SSH 事業と共同して現代社会の諸問題についての講演や座談会等を行う「グローバルリーダー講座」、社会の諸問題について国際的な視野を持ちつつ自分自身で考えて判断ができるような素養を高めることを目的とした「グローバルサロン」を展開することができました。

本年は指定 4 年目となり、昨年度に引き続き、探究活動を実践している各県の高校生同士が協働して多面的・複合的に課題を捉えることを通じて、地域発のグローバルリーダーとしての成長を促すことを目的とした「Meijo Global Festa 2017」を主催し、生徒間の交流を図ることができました。加えて、国際クラスの第 2 学年では各自の研究課題につなげることを目的としたグローバルフィールドワークをインドネシアと台湾のいずれかを選択させる形で行い、グローバルアクションとしてカナダ研修を全校生徒の希望者から選考して実施しました。

これまでに国際クラスで取り組んだ課題探究型の学習は、文部科学省が提唱する、これからの社会で求められる「新しい学力」につながるものであり、SGH の指定を機に、さらなる充実を図りながら、課題探究型の学習を国際クラスだけでなく普通科文系に広げてきました。

今後、目まぐるしい社会の変化が予測され、教育現場にもその変化への対応が求められています。SGH 事業は、生徒にとっては未来のグローバルリーダーへと成長する機会として、教員にとっては研鑽を積む機会が与えられることで指導的人材として成長する機会として機能しております。自校の過去の実践・研究から得ることができた成果と、指定校を始め各学校間の強い連携体制を生かし、これからも SGH 事業に取り組み、普及に努めていきます。

最後になりましたが、本研究の機会を与えていただいた文部科学省、事業の運営にあたり指導と助言をいただいた愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会及び SGH 運営指導委員会の委員並びに学校評議員等、関係の皆様方に厚くお礼申しあげます。また、高大協働教育の推進に積極的かつ献身的に取り組んでいただいた名城大学の教職員及び探究活動の実践に協力いただいた愛知県企業・団体、他大学の皆様、TA 等で協力いただいた学生・OB・OG の皆様に感謝の意を表します。

目次

<1> 本校について	- 1 -
<2> スーパーグローバルハイスクール構想の概要	- 2 -
<3> 平成 29 年度 SGH 研究開発完了報告	- 4 -
<4> 実施報告:研究開発完了報告の詳細	- 11 -
1 研究開発名	- 11 -
2 平成 30 年度（第 5 年次）の研究開発実施計画	- 11 -
3 研究開発の実績	- 12 -
3(1) 事業の評価	- 12 -
3(2) 探究学習に関わる授業	- 14 -
3(2)-1 総合的な学習の時間：多文化共生（国際クラス第 1 学年・2 単位）	- 16 -
3(2)-2 総合的な学習の時間：課題探究（国際クラス第 2 学年・2 単位）	- 18 -
3(2)-3 総合的な学習の時間：課題探究（国際クラス第 3 学年・4 単位）	- 20 -
3(2)-4 総合的な学習の時間：探究基礎（一般進学クラス第 1 学年・1 単位）	- 22 -
3(2)-5 総合的な学習の時間：グローバル概論（一般進学クラス文系第 2 学年・2 単位） ..	- 23 -
3(2)-6 総合的な学習の時間：課題探究（一般進学クラス文系第 3 学年・2 単位）	- 24 -
3(3) 海外研修	- 25 -
3(3)-1 ニュージーランド研修「グローバルレクチャー」	- 26 -
3(3)-2 台湾研修「グローバルフィールドワーク」	- 28 -
3(3)-3 インドネシア研修「グローバルフィールドワーク」	- 30 -
3(3)-4 カナダ研修「グローバルアクション」	- 32 -
3(4) ローカルフィールドワーク	- 34 -
3(5) Meijo Global Festa	- 36 -
3(6) グローバルパスポート	- 38 -
3(7) グローバルサロン	- 40 -
3(8) グローバルリーダー講座	- 41 -
3(9) SGH 運営指導委員会の開催	- 41 -
3(10) 成果の公表・普及	- 42 -
4 目標の進捗状況・成果・評価	- 44 -
4(1) 【研究開発目標①】	- 44 -
4(2) 【研究開発目標②】	- 45 -
4(3) 【実践目標①】	- 46 -
4(4) 【実践目標②】	- 49 -
4(5) 【実践目標③】	- 50 -
4(6) 【実践目標④】	- 52 -
4(7) 【実践目標⑤】	- 53 -
4(8) 【実践目標⑥】	- 54 -
<5> 教育課程表	- 56 -
<6> メディア掲載	- 60 -
<7> 生徒作成物	- 63 -

< 1 > 本校について

1 学校の概要

本校は大正 15 (1926) 年に名古屋高等理工科講習所として開学し、平成 29 年で創立 91 年目を迎えた。

本校では、『知・徳・体』の調和した生徒を育成する」というビジョンのもとに、生徒一人ひとりが知性と教養を身に付け、たくましさと他人を思いやる優しさを兼ね備えた心豊かな人間に成長することを目指している。

本校は、普通科と総合学科それぞれに、生徒の興味・関心や多様な能力を伸ばすためのクラス・系列を設けており、普通科には特別進学クラス・一般進学クラスのほかに、先進的理数教育を目指すスーパーサイエンスクラス、グローバル人材育成を目指す国際クラスを設け、総合学科には、数理・社会探究・地域交流・ビジネスの 4 系列を置いている。

2 教育目的

教育基本法・学校教育法に則り、知・徳・体の調和する人格の完成を目指す。創設以来の伝統に基づき、穏健中正で実行力に富み、国家、社会の信頼に値する人材を育成する。

3 教育方針

「教育目的」を実現するために、更に次の 6 つの「教育方針」を定める。

- 1 学習意欲を高める
- 2 基礎学力を伸ばす
- 3 しつけ教育を重んじる
- 4 健全な心身を育む
- 5 主体的な行動力を養う
- 6 創造力の根元である生きる力を養成する

4 生徒数とクラス数（平成 29 年度）

		< 生徒数 >			< クラス数 >			
		1 年	2 年	3 年	1 年	2 年	3 年	
普通科	特別進学クラス		108	105	135	3	3	4
	スーパーサイエンスクラス		35	30	37	1	1	1
	一般進学クラス	理系	324	155	160	8	4	5
		文系		115	113		3	3
	国際クラス		23	32	37	1	1	1
総合学科	文系		157	92	109	4	3	3
	理系			51	39		2	1
計			647	577	630	17	17	18

※ 国際クラスは SGH 事業における主対象、一般進学クラス第 1 学年及び一般進学クラス文系第 2 学年、一般進学クラス文系第 3 学年の選択者は準対象。

※ 国際クラス第 2 学年は在籍 32 名ではあるが、7 月より留学で 3 名が休学。

<2> スーパーグローバルハイスクール構想の概要

平成 25 年申請書提出時

指定期間		ふりがな		めいじょうだいがくふぞくこうとうがっこう			②所在都道府県		愛知県	
26～30		①学校名		名城大学附属高等学校						
③対象学科名		④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模			
		1 年	2 年	3 年	4 年	計	普 通 科	1409 名		
普通科		429	145	24		598	総合学科	463 名		
							合 計	1872 名		
⑥研究開発構想名		高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究								
⑦研究開発の概要		愛知県のビジネス課題を軸に、高大・産学協働の探究活動を行う。PBL の授業と課外活動とを融合させたサービスラーニングによりスキルとマインドセットを育成し、グローバルシチズンシップを獲得させる。評価・検証には、ルーブリック等を用いたパフォーマンス評価、定期的なアンケートによる統計学的手法を用いる。								
⑧研究開発の内容等	⑧1全体	(1) 目的・目標								
		地球に生きる一市民として、社会や世界の諸問題について当事者意識をもって捉え、他者との協働を通して解決に向かう意欲あふれる人材を育成する。そのための体系的な教育課程やプロジェクト型学習（PBL）の教育課程を開発し、校内及び他校に普及する。								
		以上の目的を踏まえ、研究開発目標として①「グローバルパスポート」制度のプログラム実施、②各教科における PBL の展開例の開発と定着、実践目標として①スキルとマインドセットの育成、②ローカルとグローバルを往還する視座の獲得、③国内外の研修、大会及び社会活動に主体的に参加する生徒の育成、④年間 12 回以上のプレゼンテーションの実施、⑤CEFR の B2 レベル到達率 100%、⑥国際化を進める国内・海外の大学等、課題研究を生かした研究を行える大学へ進学する生徒の育成の計 8 点を設定する。								
		(2) 現状の分析と研究開発の仮説								
⑧研究開発の内容等	⑧1全体	対象である国際クラスの生徒については、探究型学習や英語学習で一定の成果を得た。本 SGH 事業においては、従来の取り組みでは十分には育成できなかった「批判・摩擦・失敗を恐れず、変化する状況へ対応する」マインドセットや「コミュニケーションをとりながら協働し問題解決に向かう」スキルを、課題探究の各取り組みの中で育成し、それらを通してグローバルシチズンシップを形成していくことが肝要である。								
		そのため、本研究開発においては、「世界の現状と課題に触れる経験」、「自らの意見を発表し、他者と対話・議論する経験」、「自ら新たなネットワークを構築する経験」を重視し、「スキルとマインドセットの育成は、グローバルシチズンシップの獲得に有効である」と仮説を立てる。								
		(3) 成果の普及								
		他の SGH 指定校に呼びかけ、生徒研究討論会「SGH ミーティング」と生徒研究発表会「SGH フェスタ」とを毎年継続的に開催する。同時にパネルセッションも行い、全国の SGH 指定校に広く発表の場を提供する。この活動は研究成果の発表というだけではなく、生徒、教員を含めた指定校相互の交流、情報交換の場であり、また、SGH の成果を広く情報発信し理解を図る、中核拠点的な意味合いも含んでいる。そのため、名城大学と密接に連携し、産業界にも協力を求めて高大・産学協働で実施し、近隣の中学校、高等学校に向けて「SGH ミーティング」及び「SGH フェスタ」実施を案内し周知を図る。ミーティングまたはフェスタ実施後、発表校による研究集録を作成・配付する。								
⑧研究開発の内容等	⑧1全体	なお、平成 28 年度以降は優秀発表者を表彰するとともに、本校の海外研修を利用した海外での発表を計画している。								

⑧ 2 課題研究	(1) 課題研究内容 地元産業に根差したグローバル化における諸課題を軸に研究する。ただし、地球市民としての責任感ある姿勢を育むために、経済面のみのアプローチではなく、教科・高大・産学融合型のサポートにより、「人間開発」、「CSV」、「コンフリクト・レゾリューション」、「協働・共生」の観点を学ぶことを特徴とする。研究課題の具体例としては、「愛知県中小企業のグローバル化戦略と課題」、「グローバルな起業モデル」、「外国人労働者との協働・共生モデル」及び「日系企業における多様性の調和とガバナンスのあり方」等があげられる。 (2) 実施方法・検証評価 「スーパーサイエンスⅠ」、「多文化共生Ⅰ」、「多文化共生Ⅱ」及び「課題探究」において、研究課題や探究方法の理解、論文作成等を進める。それを補完するものとして、研究課題に関するフィールドワークを国内と海外で関連させて実施し、比較検討する。作成した論文及び課題解決に向けたアクションについては国内及び海外で発表を行う。探究の過程においては、有識者やSGH指定校生徒とも議論を行い、知識と理解を深める。検証は、生徒の意識及び行動の変容等についてのアンケート、プレゼンテーション、論文のルーブリック評価及びコンテスト等の受賞数によって評価する。 (3) 必要となる教育課程の特例等 特になし。
⑧ 3 上記以外	(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 専門的な知識と幅広い教養を身に付け、高度教育への意欲を高めることを目的として、国際クラス第2学年を対象にした学校設定科目「国際教養Ⅰ」及び「国際教養Ⅱ」を開設し、名城大学人間学部の講義を受講する。検証評価は、大学生と統一の定期試験結果によって行う。外国人教員による「英会話Ⅰ」、「英会話Ⅱ」、「英会話Ⅲ」を各学年で実施し、発表や討論に取り組む。評価は発表等のパフォーマンス評価と定期試験の成績を合わせて行う。 (2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 平成26年度実施分については、特になし。 (3) グローバルリーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取り組み内容・実施方法 ポートフォリオ「グローバルパスポート」を用いて、グローバルリーダー育成のロードマップの開発及び取り組み促進の材料とする。また、グローバルリーダー育成の検証評価の指針としても用いる。また、大学教員、専門機関職員、多国籍の人々等、多様な立場の人とともに、共通のテーマについて対話を通じて共に学びを深める、サロンの学習の場「グローバルサロン」を実施する。本取り組みは全校を対象として毎月実施する。課題解決に向けた活動として、ボランティア活動やアドボカシー活動等に取り組む。
⑨ その他 特記事項	主たる対象となる国際クラスは、女子生徒の割合が高く、生徒会執行部等学校全体でリーダーシップを発揮している女子生徒も多い。このことを踏まえて、女性リーダーの育成も念頭に置いている。我が国は先進諸外国と比較して女性リーダーの割合が低いと思われる。SGH教育によってグローバルな視点を身に付けた女性リーダーの育成を目指す。

< 3 > 平成 29 年度 SGH 研究開発完了報告

1 事業の実施期間

平成 29 年 4 月 1 日（契約締結日）～平成 30 年 3 月 31 日

2 指定校名

学校名 名城大学附属高等学校

学校長名 岩崎 政次

3 研究開発名

高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究

4 研究開発概要

愛知県産業に根差したビジネス課題を軸に、「共生」、「協働」、「海外への発信・展開」、「国際貢献・社会貢献」の観点から、高大・産学で連携した探究活動を実施する。また、「総合的な学習の時間」と学校設定科目、課外活動を融合させたサービスラーニングを通じて課題研究を行い、スキルとマインドセットの育成、グローバルシチズンシップの獲得を目指す。

大学・他指定校等を招聘して「Meijo Global Festa」を開催し、SGH 事業の普及を行う。

学習評価には、パフォーマンス評価を用いる。スキルとマインドセットの変容等についてはアンケートを用いて検証する。

5 管理機関の取り組み・支援実績

5(1) 実施日程

業 務 項 目	実 施 日 程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1 授業における連携												→
2 研究発表会における連携						▶▶	▶	▶			▶	
3 グローバルサロンにおける連携											→	
4 グローバルリーダー講座における連携			▶					▶				
5 グローバルパスポートにおける連携												→
6 SGH 運営指導委員会の開催								▶			▶	
7 海外研修における連携												→

5(2) 実績の説明（主対象生徒：92 名，準対象生徒 447 名）

5(2)-1 授業における連携

国際クラス第 2 学年（32 名）「総合的な学習の時間：課題探究」、一般進学クラス文系（115 名）「グローバル概論」にて、授業実施（計 3 回）。その他、海外研修事前学習等において助言。

5(2)-2 研究発表会における連携

「Meijo Global Festa 2017」をはじめとする計 5 回の研究発表会に対する助言・講評・運営。

5(2)-3 グローバルサロンにおける連携

全校生徒を対象に自由参加で行う全 7 回の講座の支援。

5(2)-4 グローバルリーダー講座における連携

全校生徒を対象に行う全 2 回の講座の支援。

5(2)-5 グローバルパスポートにおける連携

運用状況の共有及び制度の連携方法について協議。

5(2)-6 SGH 運営指導委員会の開催

11月、2月に2回開催。

5(2)-7 海外研修における連携

海外研修における提携校やフィールドワーク先の紹介、学習内容等に関する助言。

6 研究開発の実績

6(1) 実施日程

業 務 項 目	実 施 日 程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1 事業の評価												→
2 探究学習に関わる授業												→
3 海外研修							▶			▶		▶
4 ローカルフィールドワーク								▶				→
5 MeijoGlobal Festa								▶				→
6 グローバルパスポート												→
7 グローバルサロン									→			
8 グローバルリーダー講座			▶					▶			▶	
9 SGH 運営指導委員会等の開催								▶				→
10 成果の公表・普及												→

6(2) 実績の説明

6(2)-1 事業の評価

生徒の変容を中心に、研究開発目標・実践目標の進捗状況をもって事業を評価。

対象生徒を対象とした本年度の調査：

- ①スーパーグローバルテスト（以下、SGT。スキルとマインドセットの各因子における到達度調査）：5段階の順序尺度
- ②スキルとマインドセット等の各因子における向上実感調査：5段階の順序尺度
- ③②で向上実感を高めた要因調査：10項目の選択肢からの複数選択
- ④各因子における目標設定の変更状況と理由：3段階の順序尺度と記述
- ⑤次年度の活動意欲調査：3段階の順序尺度
- ⑥スキルとマインドセット、アクションプランをもとにしたリフレクションシート：記述

6(2)-2 探究学習に関わる授業

- 国際クラス第1学年（23名）総合的な学習の時間における「多文化共生」（2単位）
 国際クラス第2学年（32名）総合的な学習の時間における「課題探究」（2単位）
 国際クラス第3学年（37名）総合的な学習の時間における「課題探究」（4単位）
 一般進学クラス第1学年（324名）総合的な学習の時間における「探究基礎」（1単位）
 一般進学クラス文系第2学年（115名）総合的な学習の時間における「グローバル概論」（2単位）
 一般進学クラス文系第3学年選択者（8名）総合的な学習の時間における「課題探究」（2単位）

6(2)-3 海外研修

- 国際クラス第1学年：グローバルレクチャー（ニュージーランド）23名（3月末実施）
 国際クラス第2学年：グローバルフィールドワーク（台湾）17名
 国際クラス第2学年：グローバルフィールドワーク（インドネシア）12名
 国際クラス第3学年・グローバルサロン参加者より選抜：グローバルアクション（カナダ）6名

6(2)-4 ローカルフィールドワーク

- 国際クラス第1学年：4回（JICA 中部・南山大学人類学博物館）
 国際クラス第2学年：1回（JICA 中部）

その他、ゼミ別課題研究フィールドワーク 45か所に延べ98名

- 国際クラス第3学年：ゼミ別課題研究フィールドワーク 28か所に延べ51名
 一般進学クラス文系第3学年：ゼミ別課題研究フィールドワーク 8か所に延べ13名

6(2)-5 Meijo Global Festa

東海地区の高校生を対象にフォーラム部門、口頭発表部門の開催・実施。

11月19日（日）9：30～17：00 実施

参加校 12 校、フォーラム部門参加 108 名・口頭発表部 34 名

6(2)-6 グローバルパスポート

SGH の諸活動の記録と活動意欲を喚起する一手法として導入。

「本校事業」、「プレゼンテーション」、「フィールドワーク」、「学外事業（イベント・研修）」、「学外大会・コンテスト」「資格試験」の 6 項目の取り組み状況をマイル化して記録。

目標マイルの達成率 国際クラス第 1 学年：91.3%

国際クラス第 2 学年：93.8%

国際クラス第 3 学年：100%

一般進学クラス文系第 2 学年：0%

6(2)-7 グローバルサロン

全校生徒を対象に自由参加方式で実施。（土曜日 10：00～12：00）

計 7 回実施・参加人数合計 271 名。（国際 172 名、一般進学文系 0 名、その他 99 名）

回	日 時	講 師 ・ テ ー マ
1	4 月 22 日	濱田真輔氏（株式会社富士通 シニアエキスパート） 「次世代を担う人財となるには」
2	5 月 13 日	原田はる枝氏（NPO 法人国際理解教育推進協議会理事） 「ニューヨークに学ぶ国際性」
3	6 月 17 日	井澤友美氏（立命館大学国際関係学部助教） 「バリ島における持続可能な観光開発」
4	7 月 8 日	河村たかし氏（名古屋市長） 「訪れたくないまち NO.1 からの大逆転 魂を入れるまちづくり」
5	10 月 21 日	伊藤清道氏（中京大学国際英語学部客員教授 元トヨタ自動車インド法人社長） 「アジアで儲ける方法を考える」
6	11 月 11 日	四方義啓氏（名古屋大学名誉教授） 「インドから西へと流れる学問」
7	1 月 27 日	市野将行氏（国際協力 NGO ココアブラ 代表、名古屋 NGO センター 理事） 「愛知県の多文化共生を生きる」

6(2)-8 グローバルリーダー講座

1 学期と 2 学期にそれぞれ 1 度、全校生徒を対象に実施する。

回	日 時	講 師 ・ テ ー マ
1	6 月 20 日 (火)	池上彰氏（名城大学教授） 「2020 年のニッポン、高校生が今すべきこと」
2	11 月 22 日 (水)	桜井進氏（サイエンスナビゲーター） 「数学の誕生とこれからの時代」

6(2)-9 SGH 運営指導委員会等の開催

回	日 時	審議・報告事項
1	11 月 19 日 (日)	- SGH 運営指導委員会委員長の選出 - 多文化セッション（愛知県庁×名城高校）の報告 - グローバルフィールドワーク（台湾・インドネシア研修）の報告 - Meijo Global Festa 2017 - 今後の事業展開
2	2 月 23 日 (金)	- グローバルアクション（カナダ研修）の報告 - 文部科学省による実地調査報告 2017SGH 全国高校生フォーラム報告 - 平成 30 年度以降の SGH 事業 - 平成 29 年度入学生ニュージーランド研修

6(2)-10 成果の公表・普及

研究発表会の開催（一般公開）：5回（その中での発表件数：計128件）

外部研究発表会への参加：3回（その中での発表等件数：計5件）

※第3回高校生国際シンポジウム 研究コンテストではスライド発表部門最優秀賞受賞
他校との交流・連絡・普及

他指定校・アソシエイト校の研究発表会を参観：10校

他指定校・アソシエイト校との合同学習・研究発表会：7回

他校からの授業参観・相談等，学校訪問の受け入れ及び講師派遣：3回

本校主催 Meijo Global Festa2017 にて，ディスカッション・プレゼンテーションを開催
：12校124名が参加（見学生徒は含まず）

7 目標の進捗状況，成果，評価

7(1)【研究開発目標①】グローバルリーダー養成のための各種プログラムを「グローバルパスポート」制度において25件以上実施する。

本校事業としては，海外研修や研究発表会，講座等，30件のプログラムを実施し，目標を達成できた。

各種プログラムへの参加状況は以下の通りである。

国際クラス第1学年（23名）：延べ187名（平均約8回）

国際クラス第2学年（32名）：延べ281名（平均約9回）

国際クラス第3学年（37名）：延べ111名（平均3回）

一般進学クラス第2学年（115名）：延べ244名（平均約2回）

一般進学クラス第3学年課題探究選択者（8名）：延べ19名（平均約2回）

7(2)【研究開発目標②】PBLにおけるコンフリクト・レゾリューション，ジグソー学習，フリップトクラスルームの各教科における展開例の開発と定着を進める。

本年度は，普通科で実施されている探究的な学習を行う授業の報告をまとめた「探究的な学習報告2017」を作成した。アクティブラーニングに関する研究部会は16回開催し，京都大学溝上慎一教授を迎えての教員研修会を開催した。

また，47件の本校での研究授業・公開授業に加えて，タイのプリンセスチュラボンカレッジトラン校での研究授業も実施した。探究的な学習を推進するなかで日常的に授業見学をし合うことが増えている。

7(3)【実践目標①】探究型学習を通して，自らネットワークを構築し，協働して問題解決に向かう，スキルとマインドセットを育成する。

SGTの結果，国際クラスにおいては，入学時から各項目とも高い値を出すようになってきている。第1・第2学年ではICT活用能力を除いて顕著な変化は見られないが，一般クラスや第3学年の1年時と比較すると，入学時の値がどの項目も高い。これは，PDCAを活用した本校のSGH事業が，主対象である国際クラスには早くから浸透してきたということに他ならない。

各因子の平均値は，国際クラスは3.8～4.3，一般クラスは3.6～3.9であり，それぞれ昨年度よりも0.2～0.3ポイント程度上昇している。

以上から，国際クラスで実施してきた探究型学習はより洗練されつつあるとともに，そのエッセンスが準対象である一般進学に普及されつつあることが確認される。

以下に国際クラス第2・第3学年のSGT結果を分析する。

【主対象生：国際クラス第2学年】（図1）

- ① 昨年度1月から各因子の平均は、0.3ポイント上昇しており、全ての因子が上昇している。t検定では「思考力（+0.3）」、「アイデンティティ（+0.4）」、「リーダーシップ（+0.4）」で有意差が認められる（ $p<0.05$ ）。第2学年では新たに授業「課題探究」が開始され、海外や国内でのフィールドワークの機会が増えるとともに Meijo Global Festa でも主体の学年として活躍したことが、大きく影響していると考えられる。

- ② 入学時から比較すると、平均して0.2ポイント上昇しており、「コミュ・コラボ（-0.1）」を除いた全ての因子の値が向上しているが、有意差が認められたのは「思考力（+0.5）」、「ICT（+0.5）」、「失敗耐性（+0.3）」の因子であった。（ $p<0.05$ ）

【主対象生：国際クラス第3学年】（図2）

- ① 1月の各因子の平均は4.3ポイントである。また、昨年1月の結果と比較すると全ての因子のポイントが上昇している。t検定では「思考力（+0.4）」、「ICT活用能力（+0.3）」、「発見・解決（+0.5）」、「リーダーシップ（+0.5）」において有意差が認められた。（ $p<0.05$ ）
- ② 入学時から比較すると、平均して0.8ポイント上昇しており、すべての因子で有意差が見られたが、特に「思考力（+1.1）」、「ICT（+1.3）」、「発見・解決（+1.0）」が大きく上昇した。これは、探究型学習の取り組みの成果といえる。

また、スキルとマインドセットの各因子の向上実感調査からは、全ての因子において、「探究型授業」、「海外研修」、「フィールドワーク」が向上実感の要因になったと答える生徒が多い。したがって全てのスキルとマインドセットの向上実感の要因が探究型学習となっていることが検証された。

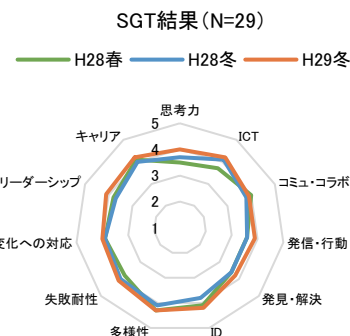


図1 国際クラス第2学年各因子の変化

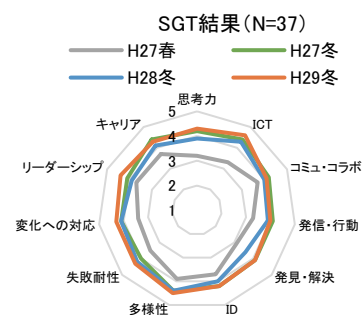


図2 国際クラス第3学年各因子の変化

7(4)【実践目標②】国内と海外でのフィールドワークを課題研究論文完成までに4回以上実施し、それらの実践的活動を通して、ローカルとグローバルを往還する視座を獲得させる。

国際クラス第2・第3学年は100%，一般進学クラス第3学年では86.5%であった。今年度実施したものに限定すると、国際クラス3学年で平均して5.5回の実施となった。

国際クラス第2・第3学年で「思考力」因子において向上実感を持っている生徒にその要因を尋ねたところ探究型授業の次にフィールドワークが多かった（図1）。ここから、フィールドワークに関わる一連の学習活動が論理的・批判的思考力の育成に寄与していると見ることができる。

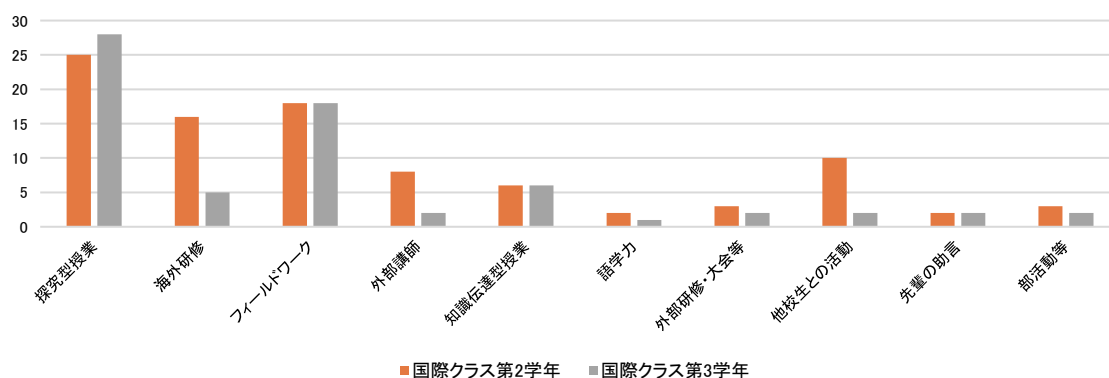


図1 論理的・批判的思考力の向上に影響したと考える要素

7(5)【実践目標③】国内外の研修、大会及び社会活動に年間3回以上参加させる。

国内外の研修、大会及び社会活動に年間3回以上参加した生徒の割合は、国際クラス全体で87.0%であり、国際クラス第1学年及び第2学年については100%達成できた(表1)。昨年度まではニュージーランド研修等を含めていたが、本年度より全員参加の研修は除いて計上した。

表1 実践目標③の結果

区 分	応募・参加数	1人あたりの平均参加数	目標達成割合
国際クラス第1学年	256	11.1	100%
国際クラス第2学年	347	10.8	100%
国際クラス第3学年	118	3.2	56.8%
一般進学クラス第2学年	113	1.0	0.9%
一般進学クラス第3学年	0	0	0%

7(6)【実践目標④】プレゼンテーションを、国際クラスの生徒は年間12回以上実施する。

第1・第2学年が14回、第3学年が17回実施し、全学年で達成できた(代表者のみが発表するものや校外の実施分は含まず)。

次年度以降のプレゼンテーションに対する意欲については、第1学年は90%以上が、第2学年は約80%が「非常に高い」、「高い」と回答した。この背景にはプレゼンテーション力の向上実感があること、学年を超えて発表を視聴する機会があることがあげられる。「先輩のように発表できるようになりたい」等、憧れが意欲につながり、互いの発表を検討する様子が見られた。

7(7)【実践目標⑤】卒業時におけるCEFRのB2レベル到達率を国際クラスの生徒は100%とする。

実用英語技能検定準1級、TOEIC Listening & Reading 785点をもってCEFRのB2レベルと読み替える。結果として第3学年では実用英語技能検定で見ると43%が準1級を合格(図1)、TOEIC L&Rでは8%が785点を取得した。昨年度と比較すると、実用英語技能検定では23%増加し、TOEICでは11%減少した。この背景には大学入試改革に向けて4技能の力が測れる実用英語技能検定の取得を重視したことがあげられる。同時に、これまでCan doリスト等を用いて4技能を重視して指導していた成果が、実用英語技能検定の配点変更により、より明確になった。

また、指定当時のB1、B2の指標であった実用英語技能検定2級で見ると、97%が達成しており(図1)、目標をおおむね達成しているとともに、TOEIC Listening & Readingのクラス平均得点の推移を見ると、第1学年前期の345点から第3学年後期の630点へと285点伸びた。

7(8)【実践目標⑥】国際化を進める国内や海外の大学等、課題研究を生かした研究ができる大学へ進学する生徒を育成する。

国際クラス第3学年においては、スーパーグローバル大学創成支援事業の採択校(以下、SGU)である、早稲田大学、上智大学、明治大学、立教大学、立命館大学、関西学院大学等への進学が決定している。

「グローバルな大学への進学意欲」と「グローバルなキャリア形成への意欲」について調査を行った。「探究を深めることのできるグローバルな大学」への進学意欲が高い(「非常に高い」と「高い」)生徒は、第1学年で77%、第2学年では83%、第3学年で76%であり、どの学年も高い値を示している。「グローバルなキャリア形成への意欲」は、学年が進行するにつれて高くなっており、意欲の高い生徒は、第1学年61%、第2学年82%、第3学年89%であった。

調査から、グローバルな大学への進学意欲に影響する要素は、「探究型授業」「海外研修」の値が高いが、グローバルなキャリア形成への意欲に影響した要素と比較すると、「フィールドワーク」と「語学力」の値が高い。「フィールドワーク」の経験を元に大学での研究を具体化

したり、英語力の伸長によって進学先を具体化したりする様子が推測できる。つまり、グローバルな大学への進学意欲は、探究型学習での学びとともに実社会との接点と英語力の向上が必要であることがうかがえる。

8 次年度以降の課題及び改善点

昨年度の課題である「一般進学クラスからの参加生徒数の増加」、「スキルとマインドセットにおける目指すべきモデル・要素の具体化」、「評価手法の研究」を引き続き課題とする。

8(1) 一般進学クラスからの参加生徒数の増加

昨年度の反省をもとに担任団の協力を得て、グローバルサロン等、興味関心・探究の深度等に合わせて多様な講師を招聘し、研究発表会で発表の機会を作って意欲の喚起を図ったが、参加数として顕著な変化は見られなかった。引き続き、ホームルーム・部活動と情報を共有し、参加を促す。

8(2) 本校が育成したいスキルとマインドセットにおける目指すべきモデル・要素の具体化

スキルとマインドセットの各因子等が意味する具体的な内容についての共通理解を図るべく、目指すべき要素と学習内容の具体化を図った。生徒・保護者にも折に触れて説明したが、今後も継続して各因子の具体化と共通理解を進める。また、段階的・構造的に目標を定める。

8(3) 評価手法の研究

昨年度の課題の1つであった、英語力を測る指標として、CEFR-J等の基準を参考にした Can Do リストを作成・活用することができた。

スキルとマインドセットの到達度を測る手法としてSGTを用いているが、生徒の目指すレベルが変化すると自己評価が下がるという課題があったため、生徒の変容をきめ細かに捉えるよう、向上実感調査や向上実感に影響した要素調査を行って、多面的な評価を試みた。

今後も継続して評価の在り方を検討する。

< 4 > 実施報告：研究開発完了報告の詳細

1 研究開発名

高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究

2 平成30年度（第5年次）の研究開発実施計画

他校に対しては、研究発表会や Meijo Global Festa の開催、グローバルサロンの公開、外部の研究発表会への参加、グローバルパスポートの配布、相談・連携等を行い、普及を進める。また、新たに、中学校に対しても、Meijo Global Festa 及びグローバルサロンを公開する。校内に対しては、引き続きグローバルサロンやグローバルリーダー講座の実施や研究発表会の開催等を行う。

評価は、国際クラス第3学年では研究論文の外部評価（大会への参加と表彰等）、大学進学結果、資格試験の達成度、アンケート調査による自己評価により行う。一般進学クラス文系コースでは、アンケート調査及び課外の SGH 活動への参加率等によって行う。

卒業生について、SGH 事業指定前の卒業生と進路先等の変容について調査する。

最終年度となることを踏まえ、3年間を通した学びの体系となるよう編成したカリキュラム内容を検証しつつ、事業の改善を行う。あわせて平成31年度入学生の教育課程を編成する。

平成30年度の海外研修は、以下の4つのプログラムである。

- (1) 国際クラス第1学年を対象とした「グローバルレクチャー」として、3月にニュージーランド研修を実施する。多様な人々の協働・共生や企業の CSR 活動の現状を学ぶ。
- (2) 国際クラス第2学年を対象とした「グローバルフィールドワーク」として、10月に台湾とインドネシアに分かれて研修を実施する。台湾では主に「日系企業の進出」、インドネシアでは主に「観光と開発」、「伝統とグローバル化」に焦点を当て、グローバル化における課題と可能性について、フィールドワークの基礎的活動を通して学ぶものとする。
- (3) グローバルアクションとして、課題研究活動を行った生徒から募集し、選抜のうえ、カナダで実施する。主なテーマは「移民社会の現状と課題」とする。平成30年度以降は平成29年度の実績を踏まえて訪問先・時期等について検討する。
- (4) 「Global Link Singapore 2018」への推薦参加の権利が与えられたのに伴って、7月にシンガポールで開かれる同大会の社会課題分野に参加する。

学年	第1学年	第2学年	第3学年
重点事項	グローバルサロン 海外研修（ニュージーランド）	課題研究活動 Meijo Global Festa グローバルサロン 海外研修（台湾・インドネシア） 海外研修（カナダ・選抜） 外部研究発表会への出場	課題研究活動 グローバルサロン 海外研修（カナダ・選抜）
次年度準備	Meijo Global Festa 個別課題研究の導入	課題研究論文発表	

3 研究開発の実績

本校では「スキルとマインドセットの育成は、グローバルシチズンシップの獲得に有効である」との仮説をもとに研究開発を実施している。

そのため、本章・次章においては、5つのスキルと5つのマインドセット（以下、5S5M）を中心に、各因子における達成度や意欲等のデータを用いて成果や課題を記載した。

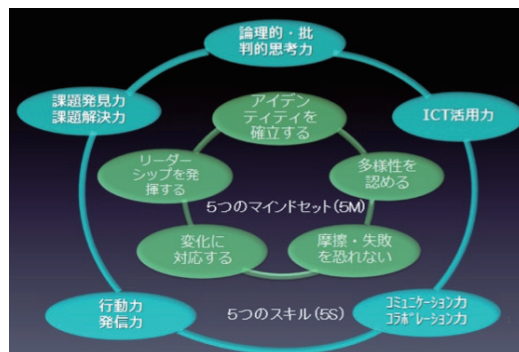
5S5Mの各因子は以下の通りである。

5つのスキル（5S）

- ① 論理的・批判的思考力（思考力）
- ② ICT活用能力（ICT）
- ③ コミュニケーション力・コラボレーション力（コミュ・コラボ）
- ④ 行動力・発信力（行動・発信）
- ⑤ 課題発見力・課題解決力（発見・解決）

5つのマインドセット（5M）

- ① アイデンティティを確立する意欲を持つ（ID）
- ② 多様性を認め共感する気持ちを持つ（多様性）
- ③ 批判・摩擦・失敗を恐れない（失敗耐性）
- ④ 変化に対応する意欲を持つ（変化への対応）
- ⑤ リーダーシップを発揮する意欲を持つ（リーダーシップ）



なお、以下の図表等において各因子の名称は、カッコ内のように省略して表記した。

3(1) 事業の評価

本校の事業については、生徒の変容を中心に、研究開発目標、実践目標の進捗状況をもって評価する。（後述「＜4＞4 目標の進捗状況・成果・評価」を参照）

生徒の評価に関しては、対象生徒全員が春と冬にSGTを実施し、それを元に事業の評価を試みた。SGTの質問肢は、本校が設定した「グローバルシチズンシップを獲得するために必要なスキルとマインドセット」をもととした5S5Mの10の因子とグローバルなキャリア設計に関する因子を取り入れ設計した。

しかし、SGTはその時点での各項目における達成度を自己評価するものであり、各項目における具体的目標は生徒それぞれで異なっている。そのため調査を補足し、適宜事業の評価とした。本年度行った調査は以下の通り。

- ①SGT（スキルとマインドセットの各因子における到達度調査）
- ②スキルとマインドセット等の各因子における向上実感とその要因
- ③各因子における目標設定の変更状況と理由
- ④次年度の活動意欲
- ⑤スキルとマインドセット、アクションプランをもとにしたリフレクションシート

①SGTの因子と質問は以下の通りである。選択肢には5段階の順序尺度を用いた。

因子： 論理的・批判的な思考力

- 1 物事を理解するときには、法則を見出す・比較する・関連付ける等しながら体系的に考えるようにしている。
- 2 日頃から筋道を立てて考えを整理するようにしている。
- 3 1つではなく複数の情報源を元にいろいろな視点・立場から考えるようにしている。
- 4 相手の話を聞きながら並行して自分の考えや質問をまとめるようにしている。

因子： ICT活用能力

- 5 社会で生きていくうえで、コンピュータを活用することは効果的である。
- 6 インターネットを活用して必要な情報を収集できる。
- 7 わかりやすくまとめることを意識して、コンピュータを使って文章や表やグラフを作成できる。

8	わかりやすく説明したり効果的に表現したりすることを意識して、コンピュータやプレゼンソフトを活用できる。
因子：コミュニケーション力・コラボレーション力	
9	主張するときには、相手に自分の意見や立場を受け入れてもらえるように工夫して主張するようにしている。
10	相手の伝えたい気持ちや意見を引き出して聞くようにしている。
11	うまくコミュニケーションが進まないときは、新しい方法を取り入れたり工夫したりして接するようにしている。
12	仲のいい友達だけでなく、多くの人と力を合わせることに価値を感じる。
13	日頃からグループの中で自分がどのような役割をとればよいかを考えて行動するようにしている。
14	意見が一致しない時には、誰かの意見を全面的に採用するのではなく、相手も自分もどちらも生かすよう行動する。
(海外研修時の追加質問)	
●	海外の人にも積極的にコミュニケーションを取りに行く（いった）。
●	海外に会いたい人や友人ができるだろうと思う（できた）。
因子：発信力・行動力	
15	自分の主張を誰かに発信したり、発表したりすることにやりがいを感じる。
16	初めて会う人とも繋がりを作るようにしている。
17	やりたいことを実現するためには、いろいろな人を巻き込んで仲間を増やすようにしている。
18	目標達成や課題解決のためには、何をすればよいかを具体的にして行動するようにしている。
因子：課題発見力・課題解決力	
19	普段見過ごしがちなことにも疑問を持ち、様々な場面から問題を見つけるようにしている。
20	なんらかの課題に気づいたときは、なんとか対処しようと思う。
21	問題に取り組むときは、「何が問題なのか」を明確にして取り組むようにしている。
22	正解、不正解がはっきりしない問題に対しても解決策を考えようとする。
因子：アイデンティティの確立	
23	自分自身やそのルーツとなるものについて考えることがある。
24	自分の国や世界のことに正しく知りたと思う。
25	他の人と比べたり、他の人よりも劣っていると感じたりすることがあっても、自分の良いところを知っている。
26	自分の将来に希望を持っている。
因子：多様性の理解と共感	
27	自分が普段「当たり前」と思っているのとは違う考え方や習慣について興味がある。
28	直接かわかりがちな他人のことやよその国のことであっても、どこかで自分にもつながっていると思う。
29	自分とは違うグループの人たちの考え方を認めることは大切だと思う。
30	自分とは違うグループの人たちと関係を持つことは大切だと思う。
因子：批判・摩擦・失敗に対する姿勢	
31	他の人と考えが違ったり、意見が対立したりしても、自分の意見を主張することは大切だと思う。
32	行き詰ってからも、粘り強く努力や工夫をし続けようと思う。
33	成功するかわからなくても、新しいことや少し難しいこと等、色々取り組んでみようと思う。
34	過程や結果から、よかったところ、よくなかったところを次に生かせるように分析することは重要だと思う。
因子：変化に対する姿勢（対応力）	
35	想定外のことに對しても、自分なりに対処しようと思う。
36	うまくいかないときは、それまでの考え方ややり方にこだわらず、新たな方法を取り入れてみようと思う。
37	見知らぬ人や見知らぬ土地のなかでも、積極的に活動していけるように思う。
38	はじめての事態や困難な問題にも、しっかり取り組みば対処できるように思う。
因子：リーダーシップ	
39	グループで活動するときは、周りの人に呼びかけたり働きかけたりしようと思う。
40	困難にぶつかったり、行き詰ったりした時にも前向きな提案をするように心がけている。
41	交渉やグループ活動では、着地点（妥協点）を見だし、それに向かう見通しを立てながら、調整するよう心がけている。
42	目標達成や課題解決の為に、メンバー全員が意欲を高くしたり、目標・課題を共有したりすることが重要だと思う。
因子：グローバルなキャリア設計への意欲	
43	将来、日本にいても海外にいても、世界の色々な問題や状況につながって生きていきたいと思う。
44	探究型学習は、自分の将来や進路を考えるうえで重要だと思う。
45	習ったことや得た知識を日常の状況に当てはめて考え、実際に活用してみようと思う。
46	世界や社会に対して自分が貢献できることは何かを考える。

②の 5S5M 等の各因子における向上実感調査については 5 段階の順序尺度で尋ね、向上実感を「強く感じる」もしくは「感じる」と回答した生徒に、その回答を導くことになった要素を複数選択で聞いた。要素群は以下の 10 項目である。（以後の各要素名はカッコ内の表記とする）

- 1 探究型学習を行う授業の経験や成果（探究型授業）
- 2 海外研修の経験や成果（海外研修）
- 3 フィールドワークの活動経験や成果（フィールドワーク）
- 4 サロンや授業等での外部講師との交流経験（外部講師）

- 5 知識伝達型授業の経験や成果（知識伝達型授業）
- 6 語学力の向上（語学力）
- 7 学外での研修や大会等への参加経験（外部研修・大会等）
- 8 他校生徒との協働学習の経験（他校生徒の活動）
- 9 先輩からの助言（先輩の助言）
- 10 部活動の経験・その他の経験（部活動等）

なお、本稿では、要素 1～3 を、「探究型学習」として捉えている。

③の各因子における目標設定の変更状況と理由については、以前に比べて 5S5M の各因子の到達目標の変化を 3 段階の順序尺度で尋ね、その変化の要因を記述させた。

④の次年度の活動意欲についての調査は、探究活動、グローバルキャリアの設計、SGH 諸活動等にむけた今後の意欲について「とても高い」から「高くない」までの 5 段階の順序尺度で尋ねた。

⑤のスキルとマインドセット、アクションプランをもとにしたリフレクションは、定量的に測定することのできない心の変容を捉えるべく、②の向上実感調査において、向上したと感じたきっかけやその時の自分の行動・思考をまとめるとともに、アクションプランを実行する際の状況・行動・気持ちの変容を記載させた。

なお、加重平均を算出する際、5 段階の順序尺度の調査では、加重平均＝（5×[5 を選択した生徒数]＋4×[4 を選択した生徒数]…1×[1 を選択した生徒数]）÷データ数）とするため、全員が最も高い評価をした場合は 5、最も低い評価をした場合は 1 となる。

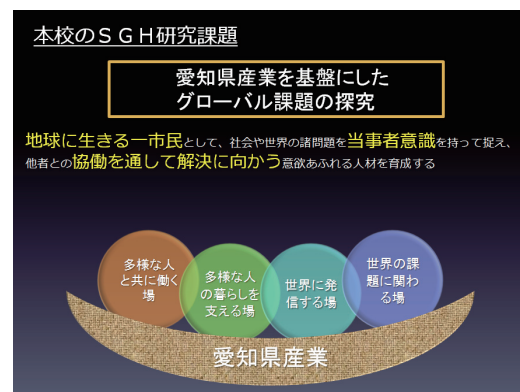
3(2) 探究学習に関わる授業

本校の SGH 事業の目的は、5S5M の因子を向上させることによって、「地球に生きる一市民として、世界（社会）のどこにいても、社会や世界の諸問題について当事者意識をもって捉え、他者と協働して解決しようとする」意欲を持った生徒を育てることとしている。

そのため、本校では、「ものづくりの拠点であり外国人労働者の多い愛知県」の特性を生かして、ビジネスの領域を軸にグローバル課題を探究するが、特に総合的な学習の時間における「課題探究」では、愛知県産業を次の 4 つの領域から学習・研究する。（右図）

- ①協働
- ②共生
- ③海外への発信・展開
- ④国際貢献・社会貢献

また、探究学習に関わる授業に共通することとして、作成されたレポートやプレゼンテーションは、ルーブリックを使用し、生徒による自己評価や相互評価も一部取り入れ評価する。各授業の目指す目的によって適宜変更して使用しているが、基本的なルーブリックを以下に記載する。



リサーチトピックにおけるルーブリック				
	4	3	2	1
リサーチトピック	どのような現象や問題を研究するのか明確である。	どのような現象や問題を研究するのか明確である。(標準)	どのような現象や問題を研究するのかはある程度明確である。	どのような現象や問題を研究するのかが明確でない。
研究テーマの背景	そのトピックを取り上げる社会的意義を多面的に認識できており、関連事項への理解も深い。	社会的意義を認識できており、それについての理解もある。	社会的意義は認識できているが、理解が薄い。	社会的意義がない。
リサーチエスチョン	トピックの中から、実現可能な具体的な研究内容を設定しており、設定に工夫が見られる。	トピックの中から実現可能な具体的な研究内容は設定している。(標準)	トピックの中から具体的内容を設定しているが、漠然としたものである。	トピックの中から具体的内容を設定できていない。
先行研究	研究テーマの背景・リサーチエスチョンに関連する文献・論文を確認できている。多角的に、賛成・反対両面の主張を確認できている。	研究テーマの背景・リサーチエスチョンに関連する文献・論文を確認できている。	不十分ではあるが、テーマに関連する文献・論文を確認できている。	関連する文献・論文を確認できていない。
研究計画	研究の全体像を理解しており、研究項目(先行研究収集・分析・調査)の見通しがある。	研究の全体像をある程度理解している。必要な研究項目に対してある程度の見通しがある。	研究項目があいまいで、研究の全体像が見えにくい。	研究項目の計画がない。
調査	観察・ドキュメント・インタビュー・アンケート等の具体的な調査を自分の研究に関連付けて計画し、対象・期間・内容も想定できている。	具体的な調査を計画し、対象・期間・内容もある程度想定している。	調査を計画しているが、対象・期間・内容については想定できていない。	調査計画がない。
思考の展開	トピックやクエスチョンについて、多面的・多角的に捉えることができ、視点を柔軟に変えることができる。	トピックやクエスチョンについて、ある程度多面的・多角的に捉えることができ、指導すれば視点を変えることができる。	トピックやクエスチョンについて、多面的・多角的に捉えようとしているが、理解が薄い。	トピックやクエスチョンについて、多面的・多角的に捉えることができていない。

レポート・課題研究論文評価におけるルーブリック				
	4	3	2	1
論理展開	客観性のあるデータに基づいて論理展開を明確にできている。内容は正確で間違いがない。	大方は客観性のあるデータに基づいて展開している。内容はほぼ正確であるが不正確なものも含まれる。	内容は大部分が正確であるが、客観性のないデータを利用しており、論理展開に矛盾が見られる。	データがなく論理展開が矛盾している。大切な情報が不足し、内容は間違っものや不正確なものが含まれる。
文章表現	誤字・脱字がなく、適切な表現が使われている。文のつながりも明瞭で読みやすく、展開をスムーズに理解できる。	誤字・脱字はほとんどなく、適切な表現が使われている。文のつながりはある程度スムーズに理解でき読みやすい。	誤字・脱字がある。適切な表現が使われているが、文のつながりが不明瞭な箇所がある。	誤字・脱字が多く、表現が不適切な箇所がある。文のつながりも不明瞭で読みにくい。
書式・レイアウト	規定の書式設定に全て当てはまり、目次・脚注・出典・図表の整理も適切に行われている。	大方は規定の書式設定に当てはまる。目次・脚注・出典・図表の整理は、適切でない部分がある。	規定の書式設定と異なる部分が目立つ。目次・脚注・出典・図表の整理は、適切でない部分がある。	規定の書式設定と異なる。目次・脚注・出典・図表も整理されていない。
先行研究・調査・分析	5つ以上先行研究を分析しており、そのうえで足を使った調査をしている。調査の手続き・分析も適切である。	3つ以上先行研究を分析しており、そのうえで足を使った調査をしている。調査の手続き・分析は一部不明瞭な点もある。	1つ以上先行研究を分析し、調査している。調査の手続き・分析は不明瞭な点もある。	文献による先行研究の分析がされておらず、調査も実施していない。

プレゼンテーションのルーブリック				
	4	3	2	1
内容の適切さ	十分に調べられており、必要な情報はすべて含まれている。内容はすべてテーマにそっており、正確で間違いがない。	調べた結果が見られ、一部不正確な情報があるものの、必要な情報は大方含まれている。内容の大半はテーマにそっている。	調べが不十分であり、いくつかの必要な情報が不足していたり、間違っていたりする。もしくは、テーマに沿っていない内容が目につく。	調べが不十分であり、間違っ情報も多い。内容はテーマの主要な部分を踏まえておらず、テーマにそっていない。
構成の論理性	情報は正しく分類され論理的に並べられている。内容を理解しやすい展開となっている。	大部分の情報は正しく分類され論理的に並べられている。内容を理解しやすいような展開を試みていることが分かる。	いくつかの情報は論理的に並べられている。しかし、分類が不適切で、関連が不明確な情報が半分程度見られる。	情報の並べ方に論理性が不足している。情報の分類がなされていない。
スライド・ポスターのわかりやすさ	文字の色、大きさ、全ての絵や図のレイアウトは適切でわかりやすく、発表内容の理解のために効果的である。	文字の色、大きさ、絵や図はおおよそわかりやすいが、更なる工夫の余地がある。内容に合わせたレイアウトはなされている。	文字の色、大きさ、絵や図はややわかりにくく、不足している部分も見られる。	文字の色、大きさ、絵や図がわかりにくく、不足が多い。発表内容の理解を助けていない。
発表技術	姿勢よく、落ち着いて堂々と発表している。聴衆に視線を向け、自分の言葉で発表している。発表全体を通じて、十分な音量がある。	姿勢よく、聴衆に視線をむけているが、自分の言葉で伝えていない部分がある。発表時間の少なくとも80%は、十分な音量がある。	姿勢に気が回らず、発表時間の半分程度は、聴衆に視線を向けていない。スクリプトに頼りがちで自分の言葉で伝えていない。発表時間の半分程度は、十分な音量がある。	姿勢が悪い。あるいは、発表中の聴衆に視線を向けていない。スクリプトに頼っている。しばしば音量が小さすぎて、全ての聴衆が聞き取れていない。

3(2)-1 総合的な学習の時間：多文化共生（国際クラス第1学年・2単位）

目 的： 平成 28 年度の研究報告書 p.19 を参照。

内 容： ワークショップやフィールドワークを織り交ぜながら、探究活動の基礎となる思考・知識・技術について習得させる。特に、各課題における問題の背景や構造等を多面的に理解することや多様性の認識と共感を育むことに留意して実施した。本年度は昨年度の内容に加え、南山大学人類学博物館との連携講座（昨年度は第2学年国際教養で実施）、ニュージーランドでの現地調査に向けた事前学習を実施した。また、グローバル教科「English Presentation」の授業と一般進学クラス第1学年で実施されている総合的な学習の時間「探究基礎」と連携する活動も実施した。



アカデミックスキルズ	(1) アイデア・思考の出し方：ブレインストーミング (2) アイデア・思考の整理の仕方：マインドマップ (3) 情報のまとめ方：レジюме作成、新聞切り抜き作品作成（「探究基礎」と連携） (4) 発表の仕方・プレゼンテーションの構成の考え方
多文化共生プログラム	(1) マインドマップによる自己理解 (2) 他者紹介記事「この人」作成 (3) 多文化理解ワークショップ 「異文化理解」、「世界の食卓」、「貿易ゲーム」、「児童労働」 「対立・問題の解消」、「難民・移民の受け入れ問題」、「バーンガ」
フィールドワーク	(1) JICA 中部 (2) 必要に応じて個別に実施
ニュージーランド研修プログラム	(1) ニュージーランド研究発表（「English Presentation」と連携） (2) 現地調査 (3) 調査レポート作成・プレゼンテーション
南山大学連携講座	南山大学人類学博物館（黒沢浩教授）による連携授業を実施（計7回） 論理的思考力の育成：博物館資料から情報を読み解く
講義 （「探究基礎」と連携）	「キャリアと私」 (1) 勝田匡彦氏 元岡谷エレクトロニクス(株)代表取締役 (2) 山本左近氏 元 F1 レーサー・NPO 法人インド福祉村協会理事長 (3) 加藤育美氏 アイミック(株) 代表取締役

成 果： 平成 30 年 1 月に、「5S5M 等の各因子における向上実感」について尋ねるアンケート調査から、本授業の目的にある「コミュニケーション・コラボレーション力」の項目と、昨年度の報告書で課題として示した「論理的・批判的思考力」と「多様性の認識と共感」に関する項目を抽出した。

結果、各項目において、「強く感じる」「感じる」と答えた生徒は、「コミュニケーション力」で 60.9%（14 名）、「コラボレーション力」で 69.6%（16 名）、「論理的・批判的思考力」で 65.2%（15 名）、「多様性の認識と共感」で 73.9%（17 名）であり、どの要素も向上した様子が伺える。特に、「論理的・批判的思考力」の向上実感に関しては、昨年度の 35.5%（11 名）から約 30%増加した。

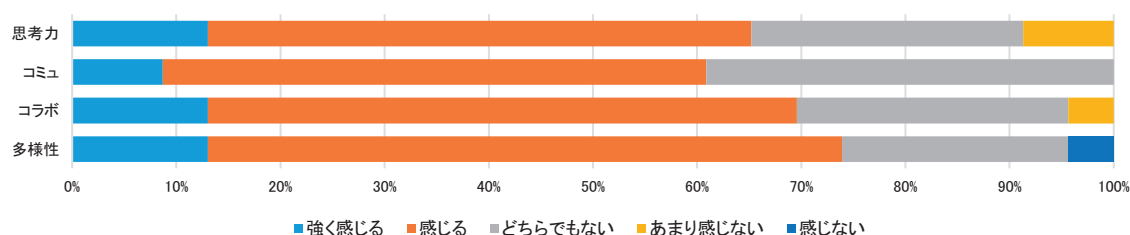


図 1 論理的批判的思考力, コミュニケーション・コラボレーション力, 多様性の認識と共感に関する向上実感

これらの向上実感は、個人作業では完成しないグループワークを数多く経験させたこと、南山大学人類学博物館での連携講座やニュージーランド研修に向けた調査研究を実施したこと、Meijo Global Festa への参加の度合いが高くなったこと等が想定されたが、向上実感の要因をどのように捉えているかについても調査すべく、図1において「強く感じる」もしくは「感じる」と答えた生徒に、その回答を導くことになった要素を複数選択で聞いた（図2）。

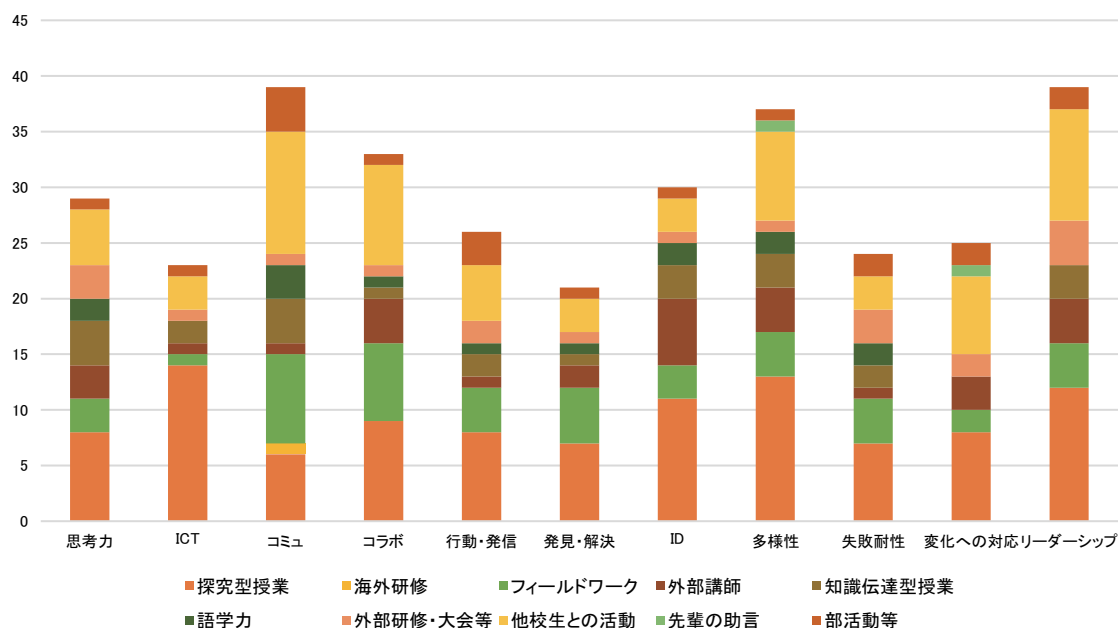


図2 各因子の向上実感に影響したと考える要素

要素「海外研修」に関しては調査時点では未実施のため、選択した生徒が1名しかいない。「多文化共生」は主に要素「探究型授業」であり、「フィールドワーク」と「外部講師」に関しても「多文化共生」の授業で実施しているので含まれると考える。

調査結果として、各因子を向上させた要素として「コミュニケーション力」を除くすべての因子で「探究型授業」と回答した生徒が最も多い（「コラボレーション力」に関しては同数）。「コミュニケーション力」に関しては「他校生徒との活動」と答えた生徒が最も多いが、これは想定した通り Meijo Global Festa 等で他校の生徒と協働学習をしたことが大きい。「ICT活用能力」が「探究型授業」がもっとも多いのは、「多文化共生」の授業内での実施もあるが、グローバル教科「グローバルプロジェクトスタディ」内での活動内容の影響も強いと想定される。

課題： 本年度は南山大学人類学博物館との連携授業（計7回）が加わり、充実した内容となったが、一方で時間的に授業担当者が到達目標に向けて十分に指導ができたと言い難い場面もあった。次年度に向けて、授業担当者の授業時間を確保するために、連携授業の回数を見直し、より効果的な指導内容になるよう検討する。

3(2)-2 総合的な学習の時間：課題探究（国際クラス第2学年・2単位）

目的： 広く問題意識を持ちながら課題について理解を深め、当事者意識を持って探究活動を行うことを目的とする。また、議論を通して、他者との摩擦に対する耐性及びリーダーシップを育み、調査や有識者からの講義を通して、論理的思考力を育むことを目指す。



内容： 「多文化共生」の上位科目として個人研究活動の導入を行うとともに、国内外のフィールドワークを支える。第3学年と合同ゼミの形式をとっているが、研究課題についての理解を深めるため、適宜第3学年とは別の講義やワークショップを行う。また、昨年度までは、第2学年から第3学年にかけて論文執筆を進めていたが、本年度は第2学年中に研究成果を10,000字程度の研究論文にまとめた。

ニュージーランド 研修プログラム	第1学年3月のニュージーランド研修を踏まえ、ポスターやレジュメ等を作成
台湾・インドネシア 研修プログラム	(1) 台湾・インドネシア地域研究 (2) 現地講義受講 (3) プレゼンテーション作成 選抜生徒が Meijo Global Festa・生徒研究発表会において発表
愛知県庁×名城高校♪ 多文化共生セッション	愛知県多文化共生推進室と協働で講義や意見交換、ワークショップ等を実施（計5回） (1) 『ライフサイクルに応じた支援』 (2) 『第2世代の活躍』 (3) 『日本人の外国人に対する意識』 (4) 支援策の案についての中間発表、愛知県職員から助言をもらう (5) 成果発表（副知事の視察および一般公開）副知事より講評をもらう
研究者講義	(1) 富士通 濱田真輔氏 課題探究のテーマについてのディスカッション (2) 名城大学経営学部 田中武憲教授 台湾研修についての事前学習 (3) 立命館大学国際関係学部 井澤友美助教 インドネシア研修についての事前研修 (4) JICA 中部 中小企業の支援・研究員制度
課題研究論文	(1) 課題研究のガイドライン (2) リサーチトピック作成 (3) 先行研究分析 (4) アウトラインの設定 (5) 調査手法の検討 (6) 課題研究論文の執筆

成果： 1月に実施した「5S5M等の各因子における向上実感と要因」について尋ねるアンケート調査より、本授業の目的にある「論理的・批判的思考力」「摩擦失敗耐性」「リーダーシップ」の3項目について分析を行った。結果、生徒が向上実感を「強く感じる」もしくは「感じる」と答えた生徒は、それぞれ97%、54%、69%であった（図1）。

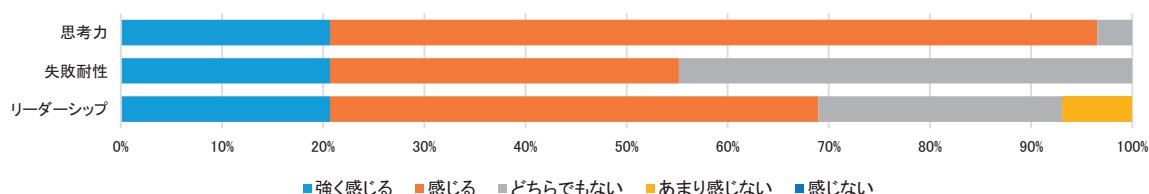


図1 論理的・批判的思考力, 摩擦失敗耐性, リーダーシップに関する向上実感

向上実感の高群（「強く感じる」もしくは「感じる」）を選択した生徒に、その回答を導くことになった要素を尋ねたところ、どの因子においても「探究型授業」と答える生徒が最も多く、それぞれ89%、56%、60%の生徒が「探究型授業」が向上実感を持つ要因となったと

答えた。また、「フィールドワーク」や「海外研修」等、本授業と密接に関連する項目の値も高いことから、本授業は一定の成果をあげているといえる。(図2)。

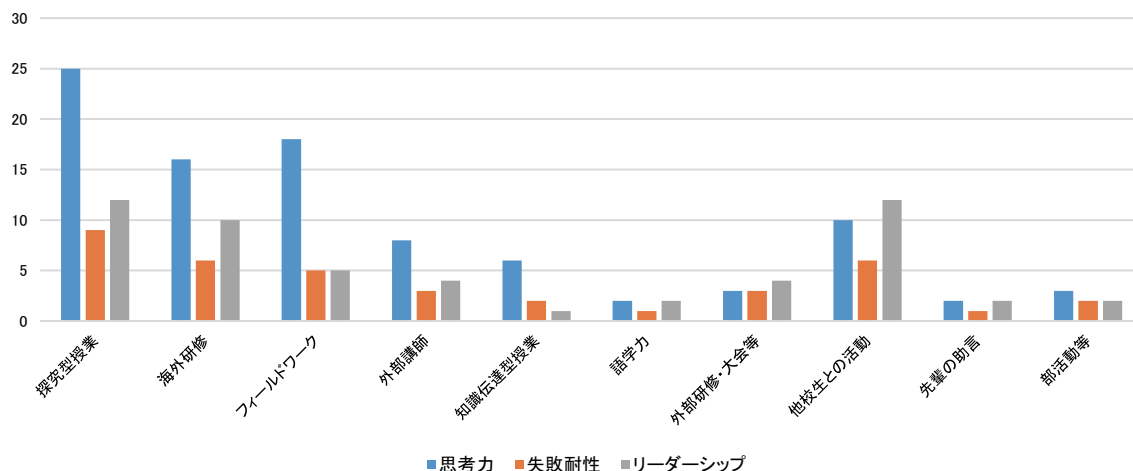


図2 向上実感に影響したと考える要素

また、昨年までのPDCAサイクルをふまえ、カリキュラムの改善を行い、本年度からは論文執筆の完成を第2学年に前倒し実施した。その成果として、これまで外部の大会での発表は第3学年が中心であったものが、第2学年においてもその機会が増えた。(後述「<4>4(5)【実践目標③】」を参照)

課題： 論文執筆の時期を第2学年に早めた「成果」を上にあげたが、その反面これまでの第3学年で論文に取り組んでいた生徒たちと比較して、論理的思考力がやや未熟であるという声が担当者から聞かれた。同様に研究のテーマを定めるまでに時間を必要とした生徒が多数おり、個別の面談を繰り返した。本年度は下位科目である「多文化共生」の授業内容で論理的思考力が育成できるように授業内容の改善を実施した。今後も「多文化共生」の授業において課題探究に向けた力のさらなる育成を図る。

研究は論文を一定の文字数書き上げて完成ではない。第3学年における「課題探究」において、引き続きの調査、発表や後輩の指導等を通して、研究の質を深めていくことが必要である。

3(2)-3 総合的な学習の時間：課題探究（国際クラス第3学年・4単位）

目的： 課題研究論文を作成し、その社会課題の解決に向かって周囲に働きかけながら、解決に向けたアクションを模索することを目的とする。その結果、論理力や表現力が鍛えられるとともに、問題解決能力の伸長が見込まれる。

内容： 先行研究の分析とフィールドワークを通じた調査を行い、自らが設定した研究課題について研究を進める。研究成果は 10,000 字程度の研究論文として執筆し、本校主催の Meijo Global Festa や生徒研究発表会等で発表する。

ガイダンス	作文と論文の違いを知る
リサーチトピックの設定	(1) 問題意識・問題の焦点を設定する (2) 問題の背景（先行研究を踏まえる）を考える (3) 調査の重要性を知る (4) 分析の方法を学ぶ・なぜその方法で分析するのかを検討する
先行研究分析	(1) 図書館を使いこなす (2) 情報検索ツールを使う
アウトラインの設定	研究の手順、方向を描く
調査手法の検討	調査の手法・分析方法を検討する
課題研究論文執筆 スライド作成	(1) 10,000 字程度の論文を作成する (2) 表紙・目次・引用等の書式を整えて提出する (3) 英語によるレジュメ・スライド・ポスターを作成する
課題研究発表会	(1) 日本語・・・平成 29 年 9 月 26 日（火） (2) 英語・・・平成 29 年 10 月 26 日（木）

成果： 昨年度から引き続き、ゼミ形式の授業を展開したことで一定の成果物が作成されたことが成果として挙げられる。また、校外において研究発表を行う生徒が増えたことや、一連の課題研究がホームルームで行った NIE (Newspaper in Education) 学習と相俟って生徒たちの能力とともに意欲やキャリア形成にも良い影響を与えたことが伺える。

昨年度大きな成果を上げたゼミ形式を継続し、4 単位中 2 単位を国際クラス第 2 学年と合同で実施することにより、研究の継続性を担保した。

国際クラスでは、昨年度までの取り組みを踏襲し、全員が調査をもとに個人研究を行い、課題研究論文を執筆、英語でのレジュメ、スライド、ポスターを作成し、日本語と英語でそれぞれ発表した。レジュメ、スライド、ポスターに関しては全て英語での表記・作成をした。日本語で作成したものを単純に英語に翻訳するのではなく、英語で考えて構成するという目的の下に、指導にあたった。

3 年間の課題研究活動を通して「論理的・批判的思考力」、「コラボレーション力」、「課題発見・解決力」、「今後の探究意欲」、「グローバルなキャリア設計に対する意欲」についてみると、全ての項目とも意欲が高い生徒の割合が顕著であった（図 1）。

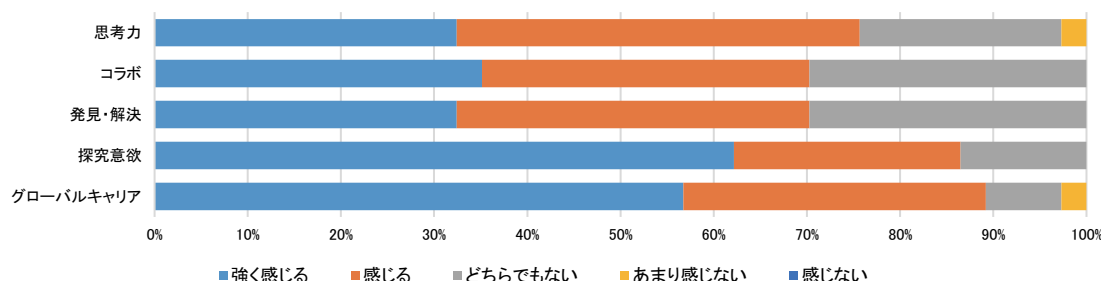


図 1 各因子における向上実感

それぞれの項目の加重平均値を算出すると、全項目とも 4.0 を越える数値であり、非常に高いことも読み取れた。

また、高群を選んだ生徒にその回答を導くことになった要素を尋ねたところ、どの因子においても要素「探究型授業」の値が最も高く、因子「思考力」では100%であった。また、因子「探究型授業」、「海外研修」、「フィールドワーク」は、「探究型学習」の一環と考えられるため、「探究型学習」が向上実感に影響したといえる（図2）。

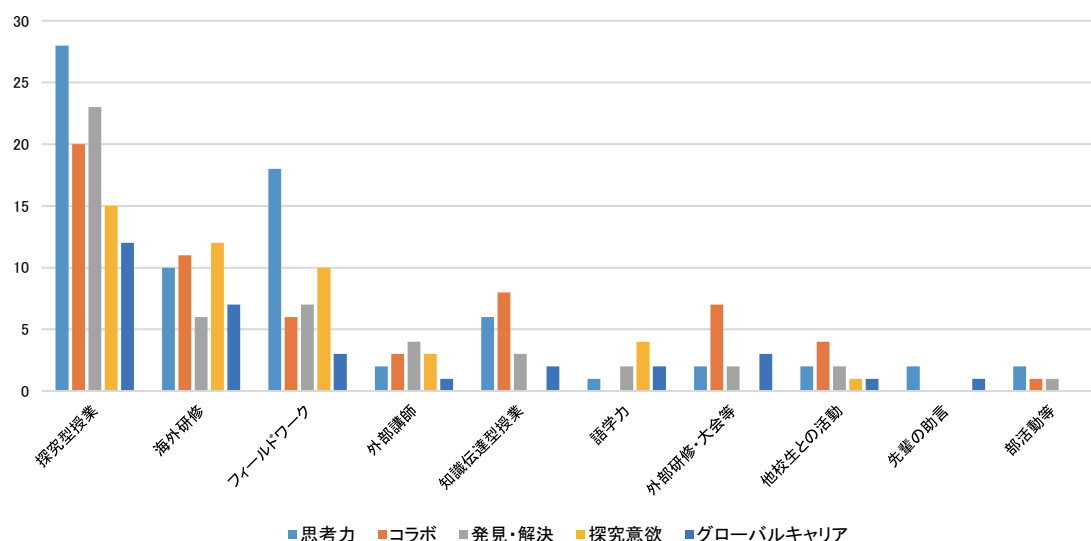


図2 各因子の向上実感に影響したと考える要素

以上より、課題研究活動によって、「探究活動」と「グローバルなキャリア設計」のどちらについても、非常に高い意欲を持った生徒が育成されたといえる。

課題： 昨年度からの引き続きの課題である、①複式授業で実施するゼミをより効果的に運営し、上級生と下級生の協働学習をより発展させること、②生徒一人ひとりの研究活動を深められるよう、効果的な指導内容・手順を策定すること、③どの教員でも担当できる形にシラバスを整備することのうち、①に関しては協働学習が比較的スムーズに展開することができたが、②・③に関してはまだまだ体系化の思索段階である。

課題研究活動は論文を作成することがゴールではなく、言うまでもなく課題に向かって周囲に働き掛けながら解決に向けた行動がとれるようになることである。発信とフィードバックから研究を深化させ、研究成果の校内外への普及をさらに活発にしたい。

3(2)-4 総合的な学習の時間：探究基礎（一般進学クラス第1学年・1単位）

目的： 探究型学習のエッセンスを広く普及する科目である。探究の基礎を支える、話す・聞く・書く・読む等のベーススキルを、新聞等を利用して学ぶ。生涯にわたって学び続けるために、主体的な行動力とメディアリテラシーを身につけて、考える力を育むことを目指す。その結果、論理的思考力やコミュニケーション力をつけるとともに、多様な価値観を知ることが期待される。



内容： 8クラスを2分割し、4クラスずつ合同で以下の内容を実施した。

アカデミックスキルズ	学習内容
考える・書く	マインドマップの作成、講演者への手紙作成 マインドマップを使った自己紹介、「15年後の自分」作成
話す・聞く	他者紹介文の作成、グループワークⅠ・Ⅱ（コミュニケーションスキル） マインドマップを利用した「この人」（インタビュー記事）作成
情報を集める	新聞から考える：興味に沿って記事を集め、ワークシート作成、発表
情報を深める	新聞から考える：集めた記事の中から研究テーマを選ぶ
まとめる・整理する	新聞から考える：新聞切り抜き作品作成（2回）
発表する	新聞から考える：まとめた内容のプレゼンテーション
将来を考える1	職業について考える：新聞記事利用し、ワークシート作成、発表
将来を考える2	講演「キャリアと私Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ ～ 働く上で大切なこと。」
将来を考える3	「15年後の自分」作成：過去の自分から将来への自分を想像し可視化していく

成果： 新聞切り抜き作品は、各自が9月と1月の計2回作成したが、それらの作品の内容を比較したところ、9月は、社会的な問題について探究するというよりは、各々の興味・関心のある出来事を列挙したものが目立った。しかし、1月の作品では、「少子化問題」「AI化に伴う問題」等、社会的な問題について探究したものが増加した。「作品作りを通じて、自分の生きている社会について詳しく知り、そのことに対して自分なりの意見を持つことができた」という生徒の感想からも、新聞記事を利用し、問題に対する様々な見解、その問題から派生する事柄について自己の考えを表現することができるようになってきたと考えられる。



Yさん(9月作成作品事例)



Yさん(1月作成作品事例)

また、社会人講話、インタビュー記事「この人」作成、円滑なコミュニケーションを目指すグループワークを通じて、生徒の感想に「人とのつながりや、まとめる能力、コミュニケーション能力の大切さを2年生からも生かしていきたい」とあるように、ある程度マインドセットへの働きかけができたと思われる。さらに、マインドマップを利用した「自己紹介」、「15年後の自分を考える」の作成や、新聞を利用した発表を通じて、コミュニケーションの基盤となる「自分自身を知る」こと、「多様な価値観を認めあう」姿勢も徐々に定着してきたと推察できる。

課題： 1単位の授業では、本授業の目的にある「探究型学習のエッセンスを広く普及する」という段階に到達させるのは難しい。他教科と連携しながら、話す・聞く・書く・読む等の探究のベーススキルを高めていくことが必要である。また、キャリア意識を育むためには、ホームルーム活動との連携が必要である。

3(2)-5 総合的な学習の時間：グローバル概論（一般進学クラス文系第2学年・2単位）

目的： 幅広い教養の習得と課題探究力、プレゼンテーション力、コミュニケーション力の向上を目的とする。現実に行っている世界的な諸課題を有識者から直接聞くことで、当事者意識や主体性を高める。一般進学クラス文系（以下、一般進学クラス）の生徒を対象に実施することで、SGHの取り組みを校内に普及させる。



内容： 主に次の2点を中心に探究活動を実施した。①本校の研究課題である「愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題」について探究活動を行い、ポスターにまとめてプレゼンテーションを行う。②研究者や専門家等から講義を受け、グローバル課題について学ぶ。以下に②にあたる内容を記す。

外部講師 一覧	
渡辺 麻由氏（株式会社ウィルゲート）	自身を見つめ、近い未来を先取りすることで見えるこれからの自分！
原田 はる枝氏（NPO 法人 IUPC）	外国で学ぼう～ニューヨークで学ぶ国際性とは～
伊川 正樹氏（名城大学法学部教授）	課題を見つけ、調べ、まとめ、発表すること

成果： ①については、社会課題に問題意識を持つところから始め、解決策をグループで検討した。4月はグループ内で発言することさえ躊躇していた生徒が、課題に繰り返し向き合っていく中で、意見を発し、グループが一丸となったプレゼンテーションができるようになっていった。

②については、今後の探究活動やキャリアについて考えさせる良い機会となった。

また、次年度以降に向けて探究活動への意欲を感じている生徒は39%（昨年度34%）で、感じていない生徒は16%（同21%）である（図1）。当該クラスにおける第3学年での探究活動は、総合的な学習の時間「課題探究」であり、個人で探究活動を行う計画である。当該科目は「地歴演習」との選択科目として実施するが、次年度「課題探究」を選択した生徒は意欲を感じている生徒の約半数にあたる約22%の25名であり、昨年度の8名（同7%）と比較して大幅に増加した。これは授業内容の変更の結果探究活動に対する関心を高められた成果であると考えられる。



プレゼンテーション用ポスター

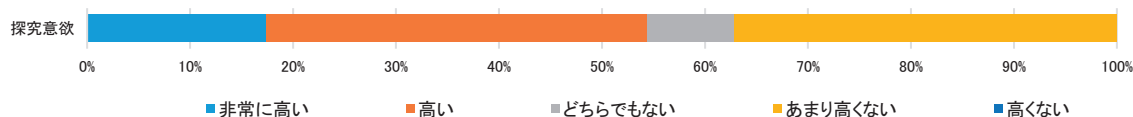


図1 次年度以降の探究活動に対する意欲（一般進学クラス第2学年）

課題： 生徒の変容を観察すると、5S5Mの育成に効果があったと考えられるものの、SGTでは、「問題発見・問題解決能力」、「行動力・発信力」、「コミュニケーション・コラボレーション力」の因子に関しては顕著な変化が見られなかった。（後述「<4> 4(3)【実践目標①】」を参照）その原因については、今後生徒と面談をする等して手がかりを探していきたい。

また、次年度「課題探究」を選択しなかった生徒の理由には、「世界史の学習が不十分のため」や、「他の受験生と学力差がつくことが心配」との声も聞かれた。改めて探究型学習の意義と進学における有用性について理解を深めることが求められる。

3(2)-6 総合的な学習の時間：課題探究（一般進学クラス文系第3学年・2単位）

目的： 課題研究レポートを作成し、その社会課題の解決に向かって周囲に働きかけながら、解決に向けたアクションを模索することを目的とする。その結果、論理力や表現力が鍛えられるとともに、問題解決能力の伸長が見込まれる。

内容： 「グローバル概論」の上位科目として設定された選択履修科目である。「グローバル概論」ではグループで探究活動を行い、ポスターに成果をまとめて発表した。本科目では個人で探究活動を行い、成果は論文にまとめて発表した。（国際クラス第3学年の内容に準じて行ったため、内容の詳細は前述「＜4＞ 3(2)-3」を参照）

成果： 成果としては個人研究に関わる因子の伸長が見られる（図1）。具体的には探究テーマを解決するための「論理的・批判的思考力」、探究活動による「課題発見・解決力」、資料を調査したり研究成果を論文にまとめたりするための「ICT活用能力」の伸長が見られる。また、グループ活動から個人研究に移行したために「コミュニケーション・コラボレーション力」は減退したと考えられる。図1のグラフ自体に全体として大きな変容が見られないのは、1学期の時点で全ての項目が既に高い値を示していたためであり、課題探究の目的が十分に達成できなかったわけではない。そのことは図2のグラフから読み取れる。課題探究を選択した8名の第2学年3学期と第3学年3学期を比較したグラフである。

個人研究を行っているので、「コミュニケーション・コラボレーション力」については伸長が見られないが、その他の項目では伸長が見られる。特に「失敗耐性（+0.9）」、「思考力（+0.7）」、「多様性（+0.7）」は伸長が大きい。これは仮説、検証、挫折、新たな仮説、検証を繰り返し体験していく中で培われたものではないかと考えられる。

また、約10,000字と長大な論文執筆であったが、一人の脱落者もなく全員が論文の完成に至り、殊に優れた研究を行った者については2月に行われた生徒研究発表会で成果を披露した。

課題： 今後の課題としては、いかに多面的・複眼的な思考や知識に基づいた研究を実施するかということが挙げられる。インターネットによる知識・情報が論拠の中心になっているため、先行研究やフィールドワークから得る知識を増やし、それらを論理的に分析する力を養う必要がある。

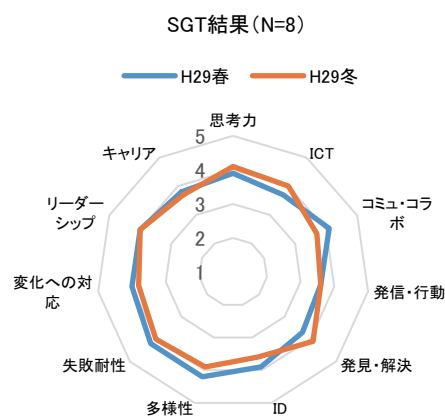


図1 第3学年1学期と3学期の比較

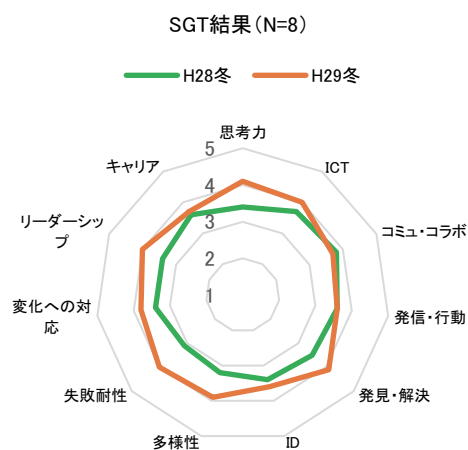


図2 第2学年3学期と第3学年3学期の比較

3(3) 海外研修

本年度のグローバルプログラム（海外研修）は3回行った。

第1学年の「グローバルレクチャー」、第2学年の「グローバルフィールドワーク」、全校から選抜で行う「グローバルアクション」である。

第1学年の「グローバルレクチャー」は3月に実施しており、本報告書への記載が間に合わないため、昨年度の3月に実施したものを記載する。

グローバルプログラム（海外研修）の目的

本校が目指すグローバルリーダー像は「地球に生きる一市民として、社会や世界の諸問題を当事者としての意識をもって捉え、他者との協働を通して解決に向かう意欲あふれる人材」とし、グローバルシチズンシップ（地球市民性）をもって行動する人物を想定している。

その育成のために海外研修では、①世界の現状と課題に触れる経験、②自らの意見を発表し、他者と対話・議論する経験、③自らのネットワークを構築する経験の3点を重視して研究開発を行っている。

「グローバルレクチャー」は、上記3点のうち、①を主に担う。また、海外に身を置くことで自らの壁を破り、グローバルな視野をもって自己を客観視すること、異文化との相違点や共通点を知り自己のアイデンティティを再確認することも目的とする。

「グローバルフィールドワーク」は、①②とともに各自の研究課題に関連する分野において学習を深め、調査を実施することを目指す。

「グローバルアクション」としては、②③を主眼として、探究活動の成果を公表することを目指す。

実施の流れ

計画は本実施をはさんで事前及び事後学習を一連の取り組みとして構成し、「総合的な学習の時間」及び教科「グローバル」の授業を中心に、グローバルサロンや自主学習も併せて実施する。

事前学習では、現地の歴史・産業等の概要、現地での調査テーマ、日本と当該国の関係等について学習し、レポートやワークシートを作成する。また、現地での訪問先には事前に質問事項を送付するとともに、現地で行う行動計画を作成して準備する。

本実施では、現地で体験的に学ぶことによって、各課題を多面的に理解できるよう設計する。

事後学習では、ポスターやレポートを作成し発表する等、研修内容を振り返る機会をつくる。また、学校全体への普及の観点から、Meijo Global Festa や生徒研究発表会等にて研修成果を発表する。

3(3)-1 ニュージーランド研修「グローバルレクチャー」

研修の特色 当該国は、先住民マオリと移民の歴史や、周辺の島国やアジア各地から多様な民族が集まる近年の状況から、エスニックダイバーシティを確立しつつある国である。また、世界で最も早く女性の参政権を認め、女性の社会参加率・活動率も高い。現地での研修を通して、日本を含む世界の現状と課題に触れる経験となる学習を行う。主に、多様な雇用・多文化共生・日系企業の海外進出・ソーシャルビジネスについて学習する。

対 象 国際クラス第1学年 31名

実施時期 平成29年3月20日（月）～4月1日（土）

費用（概算） 1名につき約40万円（修学旅行費用を含める）

内 容

	場 所	内 容
事前学習	本 校	・ニュージーランド概要について調査・発表 （英語発表はEnglish Presentationで実施） ・研修先に関するテーマ学習
現地研修	ウェリントン	・現地講師による学習活動 「NZの歴史・文化」「NZの協働・共生」 「グローバルビジネスと地域」「ニュージーランドの企業活動と社会貢献」 ・国立博物館にてフィールドワーク ・三菱自動車訪問 NZ法人社長による講義 ・ウェリントン市役所職員 Michelle McCartney氏による講義 ・ビクトリア大学訪問 国際ビジネス研究所 Jason Young氏による講義 ・ソーシャルビジネス Hana Craig氏による講義
事後学習	本 校	・ポスター作成・発表

国立博物館「ニュージーランドの歴史と現代社会」

先住民マオリの歴史・文化を知り、現代社会において多民族がどのように共生を果たしているのかについて、多様な資料を見ながら理解を深める。

共生・共働「NZにおけるエスニックダイバーシティと働き方」

ウェリントン市役所で働いている Michelle McCartney 氏から、現代のウェリントン市の国際ビジネスの状況と共に、多民族の協働・共生や女性の働き方をめぐる問題についての講義を受ける。生徒からは、特に働き方についての質問が多くされた。Michelle McCartney 氏は日本で働いていた経験もあり、日本とニュージーランドの働き方の違いについても話を聞くことができた。

日系企業の海外進出「三菱自動車のNZにおける展開」

社内見学後、ニュージーランドに進出する際の経緯と、ニュージーランドにおける販売戦略について講義を受けた。また、地域貢献として自治体へ車の寄付を行っていることもわかった。社内見学の際に、日本とニュージーランドのオフィスの職場環境に関心を持った生徒もいた。

専門家講義「ニュージーランドは大きい国か小さい国か」

ビクトリア大学国際ビジネス研究所の Jason Young 氏より、ニュージーランドを例に外交や経済等、様々な視点で国の規模についての講義を受けた。講義後、大学生よりビクトリア大学の概要の説明をうけ、構内を見学した。大学生の生活について知る機会となり、生徒にとっては良い刺激となった様子が伺えた。

世界の課題に触れる「ソーシャルビジネス」

Hana Craig 氏より現在行っているソーシャルビジネスについて講義を受けた。ニュージーランドがかかえる社会課題と、その解決策のひとつとしてのソーシャルビジネスの展開について学ぶこと

ができた。また、ウェリントンにあるソーシャルビジネスを行っている3店舗で視察をした。

成 果

「グローバルレクチャー」は海外の現状や課題に触れる経験をする目的他に「海外に身を置くことで自らの壁を破り、グローバルな視野をもって自己を客観視すること、異文化との相違点や共通点を知り自己のアイデンティティを再確認すること」も目的としている。

参加生徒に研修の前後で SGT を基礎としたアンケートを行った。選択肢は5段階の順序尺度である。事前・事後の結果を比較すると、全ての因子で向上が見られ（図1）、t検定を行うと「思考力(+0.1)」「アイデンティティ(+0.2)」「リーダーシップ(+0.5)」の因子で有意差が認められた($p<0.05$)。目的にあるアイデンティティを再確認することができた様子が伺える。

帰国後は、本研修を通して向上したと感じる 5S5M の因子を2つ選んでもらい（図2）、その理由について記載させた。その結果、SGT で高くでた因子とは異なる因子で向上実感があることがわかった。向上実感の高い因子は順に「コミュ・コラボ」、「変化への対応」、「多様性」となった。これは例年通りの

結果である。記載を見ると、「コミュニケーション力・コラボレーション力」が向上したと書いた生徒の多くが、「積極的に自分から話をすることができた」「自分以外の人が何かわからない時に説明してあげた」等と答えているが、それは「リーダーシップ」にもつながる内容である。そのため、生徒自身は「コミュニケーション力・コラボレーション力」があがったと認識していても、それが結果的に SGT の「リーダーシップ」の因子をあげる要因となったと考えられる。

研修の目的であるアイデンティティの再確認については、SGT の結果から達成していると考えられ、その他の項目でも向上が認められた。

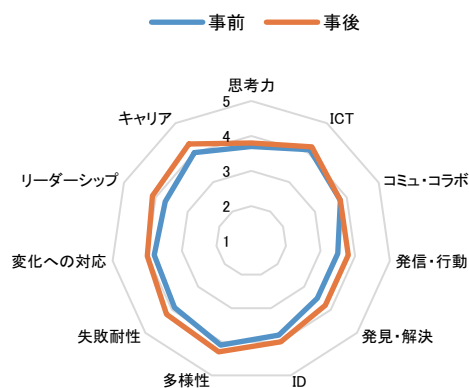


図1 各因子に関する自己分析とその変化

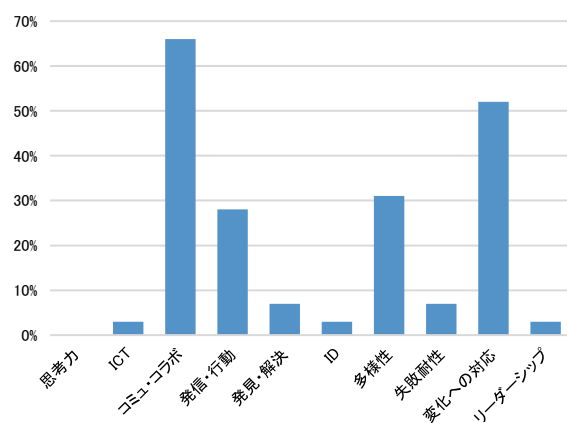


図2 研修を終えての向上実感

3(3)-2 台湾研修「グローバルフィールドワーク」

研修の特色 台湾は日系企業も多く進出しており、「グローバルビジネス課題の探究」を学ぶのに適している。研修先の台中科技大学は名城大学と連携しており、本研修に際しては名城大学経営学部の田中教授の助言・指導を受けている。現地では、日系企業の台湾進出における現状と課題を調査し、台中科技大学生と調査・発表等の協働学習を行う。

対 象 国際クラス第2学年 17名

実施時期 平成29年10月9日（月）～10月15日（日） 6泊7日

費 用（概算） 1名につき約11万円

実施内容

	場 所	内 容
事前学習	本 校	・台湾の歴史や現状について調査・学習 ・名城大学経営学部教授 田中武憲氏 講義（計2回）「台湾と日本の経済関係」（うち1回は名城大学経営学部留学生2名と田中教授の計3名で実施） ・現地調査予定の企業についての学習・事前質問事項を作成し送付
現地研修	台 北	・市内調査（故宮博物館・日本統治時代の遺物研等）
	台 中	・台中科技大学の学生との協働学習（調査・ディスカッション・発表） ・企業フィールドワーク（ジャノメ・旭硝子）「日系企業の海外進出」
事後学習	本 校	・プレゼンテーション・レポート作成 ・Meijo Global Festa で代表グループが発表

市内調査（台北）

故宮博物館では歴史を学ぶとともに、外国人観光客への対応、多言語表記等の調査・従業員へのインタビュー等を行った。歴史に触れ日本統治時代の遺構等を見ることでより一層深い学びとなった。

台中科技大学との協働学習

グループにわかれ、調査・ディスカッション・発表・企業訪問・市内研修を行った。日系企業の店舗では、内装・商品・客層・価格・宣伝方法等を調査し、その他にも興味のあるテーマについて調べ、日本との比較を通して議論した（表1）。成果発表では、質疑応答を経て台中科技大学の先生方から講評をいただいた。



表1 各グループの調査先店舗と店舗以外での調査テーマ

グループ	店 舗	店舗以外での調査テーマ	グループ	店 舗	店舗以外での調査テーマ
1	日系飲食店（ラーメン）	海外進出における成功例・失敗例からみる進出の秘訣	3	日系小売店	台湾における海外進出の傾向と効果的なマーケティング
2	日系衣料店	女性・外国人・障がい者雇用の現状と課題	4	日系飲食店（カレー）	企業の海外進出・多様な顧客（マイノリティー）への対応
3	日系化粧品店	職場での多様性の現状と課題・企業における採用の基準			

企業訪問では、現地学生の独自の視点等を知ることができた。市内研修では、日本統治時代の遺構を調査し、台湾と日本との関わりについて改めて学ぶことができた。

企業フィールドワーク「日系企業の海外進出」

研修先①ジャノメ現地企業（台湾車樂美縫衣機股份有限公司）

事業概要・製造工程等の説明の後、質疑応答が行われた。外国人労働者雇用の現状を中心に、採用の方法や台湾企業と日本企業の違い等多岐にわたる情報を得ることができた。



研修先②旭硝子現地企業（旭硝子顯示玻璃股份有限公司）

事業概要・生産技術等の説明の後、質疑応答が行われた。駐在員の方に海外で働く日本人としての経験を中心に伺うことができた。また、従業員は原則所在地域から雇用する等、地域貢献に努めていることがわかった。

成 果

本研修では、昨年度に比べて現地学生とのディスカッションや協働調査を行うことができた。全てのグループが空き時間をも利用して調査や議論を行う等熱心に取り組み、協働学習を深めることができた。また、今回の調査から日本と台湾の現状を比較することができ、共通の課題や日本・台湾独自の課題を発見した様子が伺えた。

研修の前後で行った SGT の結果を比較すると、「ICT」を除く全ての因子で向上が見られた（図 1）。t 検定を行うと、「思考力（+0.4）」「コミュ・コラボ（+0.6）」、「行動・発信（+0.3）」、「多様性（+0.4）」、「変化への対応（+0.4）」、「リーダーシップ（+0.2）」の 6 因子で有意差が認められた（ $p>0.05$ ）。昨年度と比較すると、「リーダーシップ」の因子での伸びが顕著であった。これは、協働学習において本校生徒が率先して活動を進めていたことが影響していると推測できる。

また、帰国後に本研修を通して向上したと感じる因子を 5S5M から 2 つ選び（図 2）、その要因について記載させた。「コミュ・コラボ」や「変化への対応」の因子が伸びたとする生徒の記載には、「プレゼンテーションの内容を決めるときに、大学生と意見が違って相手の考えを理解するのに苦労したが、こちらからも意見を述べ、お互い意見を出しあって内容を決めた。」「（市内調査中に）トラブルが起きた時に台中科技大学の学生が中国語で話し合い、自分たち日本人と意思疎通が図れなくなりそうな場面があったが、冷静にどういう状況か確認し、今できることを相談して解決することができた。」といった文面があったが、これらからはどちらも大学生に任せるだけではなく、自らが目的意識をもって進めていた様子が見受けられる。このような経験が SGT の「リーダーシップ」の因子の高さにもつながったのではないだろうか。

「変化への対応」の因子で向上を感じた生徒が 14%であった。（昨年度 5%）。それらの生徒からは、「調査をする際、事前に想定していたことを異なることも多く、調査がうまくいかない時に臨機応変に対応した」との記述があった。

また、「変化への対応」と「多様性」の因子を選んだ生徒の記述に共通して見られたのは、「文化や習慣の異なる学生との協働学習においてどう考えを伝えるかに苦労したが、工夫して乗り越えた」という内容である。「思考力」因子を選んだ生徒は、「議論や店舗等でのインタビューをした際に、相手の回答によって用意していた質問を変える・内容を加える等して工夫したことで身についた」と記述している。

本研修の目的とする「世界の現状と課題に触れる経験」に関しては、台湾と日本に共通する社会課題や台湾特有の社会課題等にフィールドワークやディスカッションを通して気づくことができた。また、台中科技大学の学生と調査・ディスカッション・発表をすることを通して「自らの意見を発表し、他者と対話・議論する経験」を達成した結果となった。

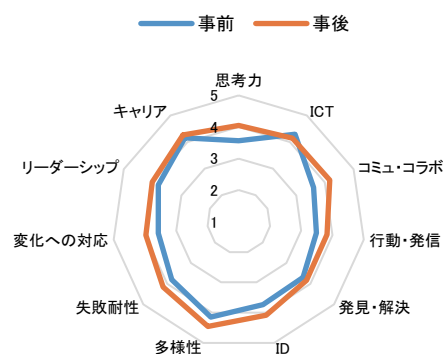


図1 各因子に関する自己分析とその変化

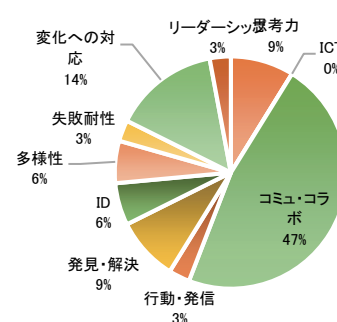


図2 研修を終えて向上実感が高かったスキルとマインドセット

3(3)-3 インドネシア研修「グローバルフィールドワーク」

研修の特色 急速に経済発展しつつ、近代日本の大家族制を彷彿させるような暮らしが続く地域であるため、伝統と産業化、地域とグローバル、同世代のキャリア形成について、体験的に学ぶことができる。現地では、「ローカルとグローバル」をテーマに「環境保全・伝統保存と観光開発」と「地域と世界をつなぐ活動」についての学習を深める。

対 象 国際クラス第2学年 12名

実施時期 平成29年10月9日～10月15日 6泊7日（機内泊を含む）

費用（概算） 1名につき約16万円

実施内容

	場 所	内 容
事前学習	本 校	・インドネシア及びバリ州の歴史や現状について調査・学習 ・立命館大学国際関係学部助教 井澤友美氏 講義（計2回） ・先行研究理解（論文6書籍2） ・現地調査の計画・準備・各研修先にむけて事前質問事項を作成し送付
現地研修	バリ州	・調査・ディスカッション「環境保全・伝統保存と観光開発」 （1）マングローブ州立情報センターにて環境調査 （2）市内調査（ウブド第一高等学校との共同調査：産業班・観光班・キャリア班） （3）サラスワティ大学学生とディスカッション ・企業等フィールドワーク「地域と世界をつなぐ活動」 （1）企業：ロイヤルピタマハホテル・バリトラベルニュース社 （2）NPO：コペルニク
事後学習	本 校	・プレゼンテーション・レポート作成 ・Meijo Global Festa 及び生徒研究発表会で代表者が発表

調査・ディスカッション「環境保全・伝統保存と観光開発」

観光開発をめぐる現状と課題をテーマに、マングローブ林・ウブド市内・ウブド第一高等学校内で調査を行った。サラスワティ大学では学生のキャリア志望の状況を調査するとともにディスカッションを行った。外国語を利用して観光産業への就業希望を持つ学生も多いなかで、観光開発によるグローバル化と伝統の保持が主な議題になった。

企業等フィールドワーク「地域と世界をつなぐ活動」

研修先① ロイヤルピタマハホテル

伝統に根差した観光産業について視察を交えて講義を受けた。地域の雇用や教育を守り、既存の文化や環境をブランディングに生かす取り組みに、滞在した他のホテルとも比較しながら理解を深めることができた。



研修先② バリトラベルニュース社

インドネシア語で書かれた日刊新聞や学生向けの新聞、旅行者向けの英語の新聞を発行するバリ島最大の新聞社にて、グローバル化とバリ社会の変化、旅行者と地域との関係性の変化等についての講義と質疑応答で学習を進めた。

研修先③ コペルニク

アメリカ・日本・インドネシアに法人があり、途上国の「生活の向上」と「自立」を目指して活動しているNPOにて、ラストマイルと呼ばれる途上国の「現場」への直接届ける持続可能な支援を可能にするため、多くの企業や大学等と協働する仕組みづくりについて学んだ。



成 果

今年度は新たにロイヤルピタマハホテルでのフィールドワークを行い、研修の目的であるグローバルとローカルを往還する視点をより具体的に学ぶことができた。

研修の前後で行った SGT を比較すると、全ての因子で向上が見られ（図 1）、t 検定からも「思考力（+0.9）」「コミュ・コラボ（+0.6）」、「アイデンティティ（+0.5）」、「多様性（+0.4）」、「変化への対応（+0.3）」、「リーダーシップ（+0.4）」と、6 つの因子で有意差が認められた（ $p>0.05$ ）。

また、帰国後に本研修を通して向上したと感じる因子を 5S5M から 2 つ選び、その要因について記載させたところ、「コミュ・コラボ」、「多様性」、「発見・解決」をあげた生徒が多かった（図 2）。

「コミュ・コラボ」因子をあげた生徒の記載には、協働学習や市内調査を例に挙げ、「浅く途切れてしまう質問や議論ではなく、1 つのことに對して深められるように工夫した」というものや、「外国人観光客にアンケートを取るのに、最初は不安や緊張が大きかったが、回数を重ねていく中で慣れてきて楽しみながらできるようになり、どのように聞けば次の質問につながるかを意識しながらできた」というものが見られた。これらの記載からは「思考力」因子への意識も感じられる。

「多様性」をあげた生徒の記述には、ホームステイでの生活習慣等の違いを受け入れた経験に基づくものが多く見受けられた。本校 SGH 事業では、ニュージーランド・台湾・カナダで海外研修を行うが、日本の生活様式や思考と最も違う状況を体験できるのが本研修である。記載からは、エスセントリズム（自文化中心主義）に陥らず、そこに暮らす人々を受け入れるのと同様、生活習慣自体を受け入れていく意思が読み取れる。

生活スタイル、ふろやトイレが全く違う。とても戸惑った。…（中略）…自分なりに様々な方法を試して、その状況を解決できるようにした。生活スタイルの違いはそのまま受け入れた。多様性を理解し共感する気持ちとは、いろいろな文化を体感していくこと、そしていろいろな文化を持っている人が身近にいることに気づくことだと思う。

また、「発見・解決」因子をあげた生徒は、現地生徒と協働で行う外国人観光客への市内調査を例に挙げ、次のように記載している。

用意した質問の意図が現地生徒に伝わらなかったり、答えてくれない観光客が多かったりして、どうするべきか考えた。…中略…うまくいかないことに目をつぶらず、その場その場で今できる解決策から試していった。

当該生徒たちが参加した昨年度のニュージーランド研修で最も向上実感が高かった因子も「コミュ・コラボ」であった（平成 28 年度の研究報告書 pp.29 - 31 を参照）が、その背景が「英語での意思疎通が生徒の関心事」であり「英語を使って過ごした」経験からくる向上実感であったのに比べ、これらの記述からは、試行錯誤しながらも 5S5M の様々な因子に関わる分野で成長している様子がうかがえる。

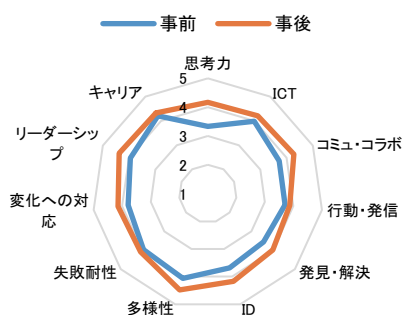


図 1 各因子に関する自己分析とその変化

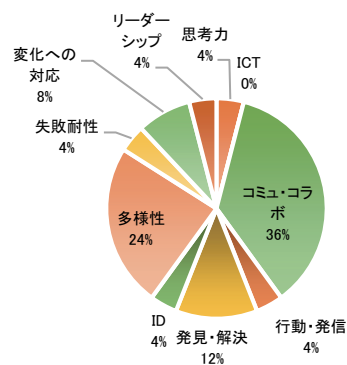


図 2 研修を終えて向上実感が高かったスキルとマインド

3(3)-4 カナダ研修「グローバルアクション」

研修の特色 当該国は、多文化国家で日系移民コミュニティもあり、日系企業も多く進出している。日系企業の進出における現状と課題の現地調査をするとともに、多文化共生の観点から学習し、愛知県における多文化共生課題について考える。

対 象 全校生徒の希望者から選抜された生徒 6 名 引率 1 名

実施時期 平成 30 年 1 月 27 日（土）～2 月 4 日（日） 7 泊 9 日

費用（概算） 1 名につき約 12 万円



実施内容

	場 所	内 容
事前学習	本 校	・今回の研修全般の説明、ホームステイ先での注意事項等 ・カナダの歴史や現状について調査・学習 ・現地調査等に向けた下調べや質問事項作成等準備
本実施	トロント	・講義：JETRO・日本総領事館
	キッチナー	・Forest Heights College Institute の生徒との協働学習（ディスカッション等） ・企業フィールドワーク（トヨタ工場・地元商店・観光センター等）「日系企業の海外進出」 ・講義：日系カナダ協会・日本商工会
事後学習	本 校	・プレゼンテーション・レポート作成 ・生徒研究発表会で代表者が発表

講義（トロント・キッチナー）

講義① JETRO トロント

日系企業の進出状況の変遷と現状について説明を受け、無印良品とユニクロのマーケティングを例にとり、カナダには所得レベルの高い購買層が多いため、品質の良さを前面に出すことで成功してきていることが紹介された。各州の特質を活かした産業の特徴や規制緩和における状況についても理解を深めることができた。

講義② 在トロント日本国総領事館

カナダ国土の概要を踏まえて、日本にとってのカナダの重要性を、地理的、民族的、資源や工業的側面から学習できた。その中で、官僚の半数が女性である点や、外交上で多国間主義を標榜していること等、日本とは違う方向性に生徒たちは興味を持って質問をしていた。

講義③ 日系カナダ協会

戦前と戦中の日系人に対する対応の違いが二世の方から語られるとともに、一世の方からは、移住からカナダ社会への同化までの困難と、現在の課題について語られた。事前学習での理解と合わせ、日系コミュニティの現状と課題を深く理解できた。

講義④ トロント日本商工会

「カナダへの日系企業進出の歴史と現状、問題点」、「日系企業駐在員の苦勞」、「トロントの日系コミュニティの歴史と現状」、「トロントでの日本語教育と帰国子女教育」の 4 点を中心とした説明を受け、盛んな質疑応答がなされた。



Forest Heights College Institute の生徒との協働学習

現地の高校生との協働学習として、多文化共生についての意見交換を行った。

企業見学（トヨタ工場）

生徒たちからは日本の工場との違いや労働者の国籍や宗教への配慮等について質問がなされた。工場内では KAIZEN という言葉が随所に見られ、習慣や文化の伝達も伺えた。

成 果

参加者は選抜により、国際クラス第3学年1名、国際クラス第2学年4名、一般進学クラス第1学年1名の計6名となった

研修の前後に行った SGT では、国際クラスからの参加者は変容がほとんどなかった（図1）のに対し、一般進学クラス第1学年の参加者の結果が特徴的であった（図2）。当該生徒は一般進学クラス内でも成績上位で意欲も高い生徒であるが、研修後には「思考力」や「行動・発信」、「変化への対応」の因子等で大きくポイントが減少している。リフレクションシートには、「自分の力がまだまだ足りないことを改めて感じた。先輩のように質問をしたり、積極的に行動したりできるように、もっと挑戦したいと思う。自分が思っていたようには行動できなかったことはとても悔しいけれど、これから自分がどうなりたいかを具体的に考えることができた。」との記載があり、国際クラスの上級生との差異を感じ、自己の現状に課題を持つとともに今後の学習意欲・活動意欲が喚起されたことが分析できる。本研修後、当該生徒は他の一般進学クラス生と共に他の SGH 事業への参加も申し出ており、一般進学クラスからの SGH 各種事業への参加率が低い現状において、意欲のある一般進学クラス生徒の存在が SGH 事業普及の核となることが期待される。

また、参加した国際クラス生徒のリフレクションシートには次のような記載が見られ、「思考力」や「発見・解決」、「変化への対応」、「リーダーシップ」の因子において向上実感があるとの回答が得られた。

- ・事前学習で学んだ資料等から派生させて現地でより踏み込んだ質問ができたり、新しい観点を見いだせたりした。
- ・事前学習も同じだが、現場でどんなことをしたらより学習が深まるか、より身になるかを考えるのが難しかった。考えたことをうまく伝えるにも工夫が必要だと感じた。自分のリーダー力はまだまだだと実感したが、全体像や違う角度からの視点をもちながらより積極的に取り組み続ける。
- ・異文化を持つ人々がどのように共生しているのか考える中で、課題解決に必要な力を意識した。カナダでは互いに文化や前提が違うことを知っているからこそ自分の意見や立場を明確にしていた。日本のように似通った文化を共有する中でも、課題をぼんやりと共有したり立場を明確にできなかったりするのはではなく、焦点を明確にすることで課題解決のスピードが速まるのではないかと感じた。」

課 題

SGT において、国際クラスからの参加生徒の顕著な変容が見られなかった背景には、「これまでの研修に比べて現地での学習を深められたという実感が少ない」という記載があるように、研究を深めたり、公表したりする機会が少なかったという現状がある。カナダでの研修は本年度が初めての実施であったが、今後、生徒の研究レベルや意欲に見合う研修にするべく、現地担当者や研修先との更なる調整が必要である。

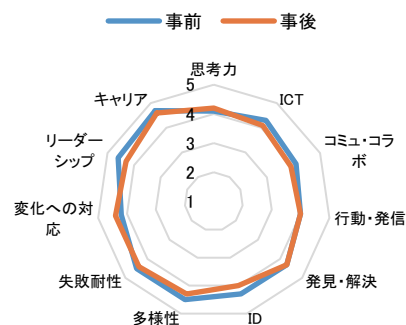


図1 各因子に関する自己分析とその変化
(国際クラス第2学年・第3学年参加者)

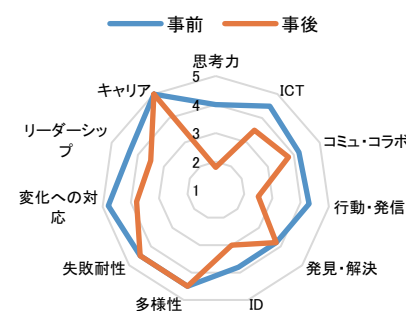


図2 各因子に関する自己分析とその変化
(一般進学クラス第1学年参加者)

3(4) ローカルフィールドワーク

目 的： 社会や世界の課題に触れ、知識、スキル、マインドセットを統合して活用する学びの場とする。また、この経験を通して、自らの足を使って学ぶ姿勢や当事者意識を持って探究する姿勢を体得させることを目的とする。

内 容： 社会課題や研究課題に基づいて行う。実施した内容は以下の通りである。

「総合的な学習の時間」における「多文化共生」にて全員実施：国際クラス第1学年

研 修 先	内 容
南山大学人類学博物館（計3回）	博物館資料から情報を読み解く
JICA 中部	JICA 概要・国際協力活動

「総合的な学習の時間」における「課題探究」にて全員実施：国際クラス第2学年

研 修 先	内 容
JICA 中部	JICA 概要・研修員受入事業・民間連携事業（BOP ビジネス）

「総合的な学習の時間」における「課題探究」としてゼミ別・個別実施

：国際クラス第3学年・国際クラス第2学年・一般進学クラス第3学年

先行研究等で得た情報や仮説の検証を行うため、適宜課外活動時間等を使って実施した。

課題研究との接点	研修先	国際3年	国際2年	一般3年	課題研究との接点	研修先	国際3年	国際2年	一般3年
① 協働	(株) スリーエイト			1	② 共生	名古屋市教育センター		1	
	(株) トットメイト		1			フジクリーン工業 (株)			1
	(株) ポピンズ	1	1			ラッシュ・インターナショナル	3	4	2
	(株) リンクリンク		1			愛知県県民生活部社会活動推進課多文化共生推進室	2	4	
	Harmony For		4			愛知県環境部水地盤環境課			1
	I.C. NAGOYA		2			高浜市役所	1		
	INF 日本語教室 (久保一色クラス)		1			在名古屋ブラジル総領事館	1	3	
	Man to Man Passo	3				豊田市国際交流協会		3	
	Man to Man (株)	3	7			名古屋 YWCA	3		
	あいちマザーズハローワーク		2		③ 海外への発信・展開	市民自転車フォーラム		2	
	ガールスカウト豊田支部		1			トヨタ産業技術記念館	2		
	ドコモ CS 東海 (株)		1			トラベルヘルパーエ・ある倶楽部		1	
	JICE 中部支社	4				中伝毛織 (株)		1	
	名古屋発達障害者支援センターりんくす名古屋		1			ナカモ (株)		3	
	名古屋市身体障害者福祉連合会福祉センター			2		名古屋伝統産業協会		1	
	富士通	1	5			みずほ興行 (株)		1	
	マイ・ビジネスサービス	1				愛知県産業労働部産業振興科	1		
	愛知大学キャリア支援課		1			愛知県観光協会	4	3	1
	一時お預かり専用託児所はないと		1			愛知県振興部アジア競技大会推進課		1	
	名古屋国際センター		10			葛利毛織工業 (株)	1	1	
	名古屋市身体障害者福祉連合会第一ワークス・第一デイサービス			2		生方製作所	1		
	名古屋大学学生支援課 就職支援室		1			大須商店街	1	1	
② 共生	(株) ブルーボックス	1				名古屋市観光文化交流局観光交流部観光推進室	2	3	
	LIXIL 中部支社	4	4	3		名槌屋	1		
	NPO 法人 ASTA		1			(株) 末廣堂		1	
	NPO 法人 PROUD LIFE		1		④ 国際貢献・社会貢献	OM ヒーター (株)	1		
	愛知淑徳大学 ジェンダー・女性学研究所		3			愛知県振興部環境局観光振興課		1	
	移民政策学会冬季大会 (南山大学)		4			愛知県環境部大気環境課地球温暖化対策室	1		
	グローカルカフェ		3			(株) トヨトミ		1	
	ダールレイマーンインターナショナルスクール放課後教室	1				(株) 調剤薬局キョーワ	1		
	中京大学公開講座		1			JICA 中部		3	
	中村保育園		1			東山動植物園	1		
	名古屋モスク	4				フェアビーンズ		1	
	名古屋港水族館	1				計	67	51	98
									13

成 果： 本年度は 67 の企業・団体等に協力を得ることができた。昨年度の協力企業・団体が 50 から着実に研修先を増やしており、愛知の産業界や行政等にも SGH 事業の理解を広げることにつながった。

同時に、生徒たちに社会の一員としての意識も芽生えてきているようで、NPO 等へフィールドワークを行った生徒は、その後も継続して該当の活動に参加する様子も見られた。

「世界や社会についてもっと知りたいと思うか」という質問については、国際クラス第 2 学年で 93%（「非常に高い（55%）」、「高い（34%）」）、第 3 学年で 97%（「非常に高い（62%）」、「高い（35%）」）が高群を選択しているが（図 1）、彼らにその回答を導くことになった要素を聞いたところ、両学年とも「探究型授業」や「海外研修」に並んで、「フィールドワーク」の値が高い（図 2）。これらの経験が社会や世界への探究意欲や接点を生み出していると考えられる。（次年度以降のフィールドワーク参加意欲及び論理的・批判的思考力の向上に影響したと考える要素の調査結果については、後述「<4> 4(4)【実践目標②】」を参照）

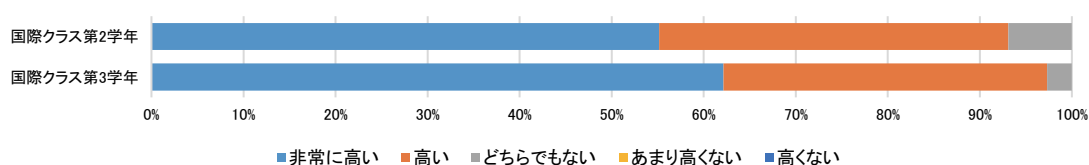


図 1 「世界や社会についてもっと知りたい」という意欲

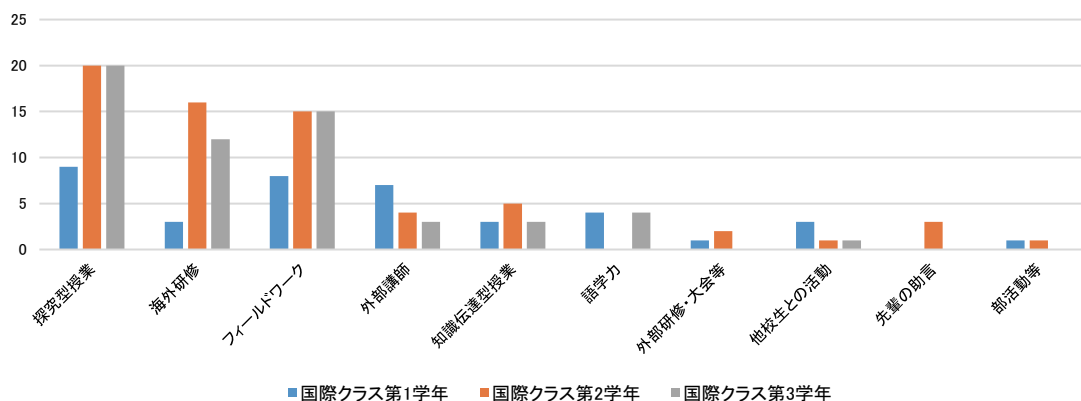


図 2 向上実感に影響したと考える要素

課 題： 研修先との連携を重視し、研修先・教員・生徒との関係を密に取ることを心掛けた授業運営をしている。フィールドワーク受け入れ先の拡大は実現できたが、企業や調整にかかわる教員の負担は否めない。今後、課題研究に取り組む生徒が増えるなか、いかに負担を増やさずに研究の質を担保していくかが課題である。

また、本年度一般進学クラス第 2 学年は授業の展開上、フィールドワークを実施することができなかった。第 3 学年での課題探究への取り組む前の段階として、ローカルフィールドワークが実施できることが望ましい。

3(5) Meijo Global Festa

目 的： 平成 28 年度の研究報告書 p.37 参照。

日 時： 平成 29 年 11 月 19 日（日）9:30～17:00



内 容： 東海地区の高校生を対象に、フォーラム部門、口頭発表部門、の 2 つの部門を実施した。フォーラム部門は 6 つの分科会で、それぞれ事前課題が与えられたうえで、議論し発表資料を作成した。口頭発表部門では午前のフォーラムでの作成資料を基にした成果報告と課題研究活動の発表を行った。両部門において名城大学文系学部の教授陣に指導をいただいた。また、企画・運営は有志生徒で構成された生徒実行委員会を中心に行った。

フォーラム部門：参加校 9 校・参加生徒 108 名（昨年度 参加校 7 校・参加生徒 85 名）

分科会 A 「多文化共生の課題と展望」

講師：名城大学法学部教授 近藤敦氏

分科会 B 「国民国家とは何か」

講師：名城大学経営学部教授 村松恵子氏

分科会 C 「日本企業の海外展開からグローバル化を考える」

講師：名城大学経済学部学部教授 杉本大三氏

分科会 D 「インバウンドツーリズムと地域」

講師：名城大学外国語学部教授 二神真美氏

分科会 E 「多文化共生と言語」

講師：名城大学人間学部教授 岡戸浩・伊藤康児・加藤昌弘氏
名城大学人間学部助教 加藤昌弘氏

分科会 F 「グローバル時代の名古屋の魅力を考える」

講師：名城大学都市情報学部准教授 杉浦伸氏



口頭発表部門：参加校 6 校・発表 15 本（昨年度 参加校 6 校・発表 12 本）

講 評：名城大学経済学部教授 渋井康弘氏及びフォーラム部門講師

本校からの発表

佐々木美緒・大崎佑真・中村理沙・西村俊哉・干川夏美 “愛知県多文化共生推進プランの提案”

伊藤真彩・堀衣利佳・富田あゆみ・梅谷未来 “グローバルフィールドワーク調査報告”

鬼塚侑杜 “BOP Business Approach by the Aichi Industry”

全体挨拶・講評

名城大学附属高等学校学校長 岩崎政次氏

名城大学副学長 福島茂氏

名城大学経済学部教授 渋井康弘氏

参加校一覧

岐阜県立大垣北高等学校，愛知県立旭丘高等学校，三重県立四日市高等学校，
国立名古屋大学教育学部附属中・高等学校，愛知県立時習館高等学校，
中部大学春日丘高等学校，名古屋中学校・高等学校，愛知県立津島高等学校，
岐阜聖徳学園高等学校，同朋学園同朋高等学校，ブラジル人学校エスコーラネクター，
名城大学附属高等学校

成 果： 本年度は，SGH の活動を普及するために，中部地区の SGH 指定校・アソシエイト校だけでなく，本校所在の西区および隣接する中村区，そして会場である名城大学ナゴヤドーム前キャンパスのある東区の全高等学校，多文化共生の観点からブラジル人学校に参加を

呼びかけた。その結果、参加校は 12 校（昨年 9 校）となり、広く普及することができた。参加生徒は延べ 142 名（実 124 名、昨年度は実 96 名）、聴講生徒を含めると実 250 名以上の参加となった。また、昨年度の反省を踏まえ、ランチミーティングの充実とプレゼンテーション充実について、実現することができた。

参加生徒には、参加前に「本事業で伸長を期待する主な 5S5M の因子」を、参加後には「本事業で最も影響を受けた 5S5M の因子」を聞いた。有効回答数は参加前の調査が他校生徒 29 名、実行委員を除く本校生徒 22 名、実行委員 20 名、参加後の調査が他校生徒 33 名、実行委員を除く本校生徒 26 名、実行委員 25 名である。

調査結果から、他校生徒は、参加前は「コミュ・コラボ」因子が最も高いが、参加後は「発見・解決」が最も高くなった。一方、実行委員を除く本校生徒は、事後に「発見・解決」は高くなっているが、事前事後共に「コミュ・コラボ」の因子が最も高い。

リフレクションシートの自由記述から分析すると、本校生徒はディスカッショングループのリーダー等になっており、グループ活動の進行に焦点をおいている様子が伺えた。一方、他校生はディスカッションの内容に焦点をおいている様子が伺えるため、このような違いがうまれたと考えられる。

実行委員に関しては、事前は因子「リーダーシップ」が最も多く、参加後も「コミュ・コラボ」と並び「リーダーシップ」を答えた生徒が多い。

また、他校教員（全 8 名）に 5 段階の順序尺度を用いて本事業の満足度と今後の参加意欲について聞いたところ、どちらも「満足している」「まあまあ満足している」との回答が大半を占めた。他校教員は本事業を概ね高く評価をしており、今後も本事業を継続して実施する意義があると考えられる。

後日、参加高校（岐阜聖徳学園高等学校）から、本事業をモデルケースに本校と連携して事業開発を行いたいと相談を受けるとともに、本年度参加できなかった高等学校（愛知高等学校等）からもすでに次年度の参加表明を受けている。

課題： 昨年度の課題であった「他校との関わりの薄さ」については、新たにランチミーティングの時間を設ける等、改善策を講じた。参加生徒の多くが学外の生徒とのつながりを目的に参加している様子がリフレクションシートからも見受けられた。そのため、内容の質を下げずに、今後はより多くの参加者が交流できる時間をもうけることを検討する。

事前学習の程度が参加校により異なったことが、時間が足りなくなった要因として考えられるので、事前学習に関しては内容や方法等の検討が必要と考えられる。

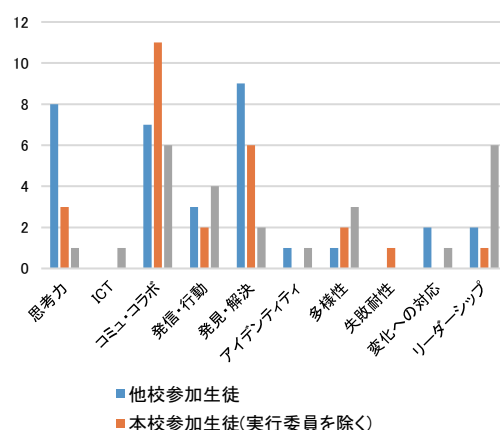


図 1 事前の要素

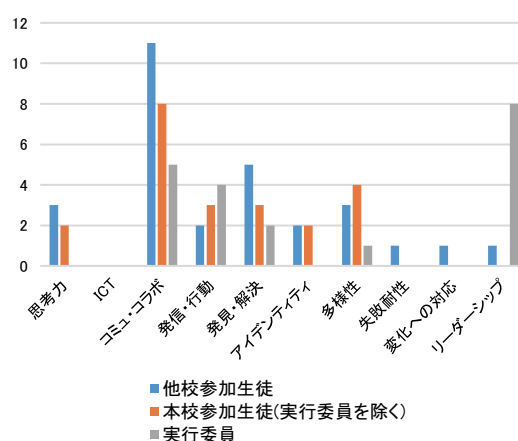


図 2 事後の要素

3(6) グローバルパスポート

目 的： 平成 28 年度の研究報告書 p.40 を参照。

内 容： 平成 28 年度の研究報告書 p.40 を参照。



平成 29 年度グローバルパスポート概要

- 1 対象生徒 国際クラス在籍者及び一般進学クラス文系第 2 学年、第 3 学年、グローバルサロン参加者
- 2 対象項目・マイル数 (目標マイル 1 年修了時 2000, 2 年修了時 3150, 3 年修了時 4250)
 - (1) 本校事業への参加 (年間目標マイル 500)
 - グローバルサロン (参加 50 マイル)
 - 高大連携講座・ミーティング・フェスタ (参加 50 マイル) ※運営の場合は+50 マイル
 - 指定の名城大学主催のイベント (参加 50 マイル)
 - 海外研修 (参加 100 マイル)
 - (2) 本校プレゼンテーション (年間目標マイル 500)
 - 担当教諭の認めるプレゼンテーションの実施 (1 回 50 マイル) ※選抜された場合は+50 マイル
 - (3) 本校フィールドワーク
 - 担当教諭の認めるフィールドワーク (1 回 50 マイル)
 - 担当教諭の認める海外研修中のフィールドワーク (1 回 50 マイル)
 - (4) 学外事業 (イベント・研修) への参加 (年間目標マイル 500)
 - 指定の学外イベント (1 回 50 マイル)
 - 指定の学外研修 (1 回 50 マイル)
 - (5) 学外大会・コンテスト (年間目標マイル 300)
 - 指定の大会・コンテストへの作品 (論文・作文・作品等) 応募 (1 回 50 マイル) ※入賞等の場合は+100 マイル
 - 指定の大会・コンテストへの出場 (プレゼンテーション等) (1 回 50 マイル) ※入賞等の場合は+100 マイル
 - (6) 資格試験 (目標マイル 1 年修了時 550 2 年修了時 1000 3 年修了時 2100)

マイル	英検	マイル	TOEIC	マイル	GTEC・CBT	IELTS	TOEFL iBT
1000	1 級	1000	945-990	1000	1400	7.0-	95-120
800	準 1 級	500	830-940	800	1250-1399	5.5-6.5	72-94
350	2 級	300	730-825	350	1000-1249	4.0-5.0	42-71
150	準 2 級	200	650-725	150	700-999	3.0	
		150	550-645				
		100	470-545				
		50	380-465				

成 果： 本制度は、平成 26 年度末から名城大学国際化推進センターの支援を受け開発を進めてきた。冊子形式は平成 27 年度に初版が完成し、運用 3 年目となる本年度は、名城大学のグローバルパスポートが改訂されるのに伴い共通性の維持と使い勝手の改善を目的とした改訂版を作製した。具体的には、1 年修了時の目標マイルを活動の実態に合わせて 2600 マイルから 2000 マイルに引き下げた。それから昨年度までの 5 項目のうち国際クラスのみが対象である「一斉英単語テストの点数」を廃止し、「フィールドワーク・プレゼンテーション実施」を「本校プレゼンテーション」と「本校フィールドワーク」に細分化し、「学外授業への参加」を「学外事業 (イベント・研修) への参加」と「学外大会・コンテスト」に細分化した。また、「資格試験」の対象資格を従前の「実用英語検定」、「TOEIC」に「GTEC CBT」、「IELTS」、「TOEFL iBT」を加えた。その結果、項目数は昨年度までの 5 項目から 6 項目となった。このことにより生徒各自が自分の活動をより具体的に振り返ることができ、不足している活動に取り組むきっかけになることを期待できると考える。

さらに、今年度は生徒数に加えて、普及のために他校関係者に配付するための分も印刷した。

本年度のグローバルパスポート対象事業は、上記の(6)資格試験を除いて、以下の通りである。

合計で 199 件の事業が実施された（表 1）。

表 1 グローバルパスポート事業集計結果

区 分	内 容	件 数
本校事業	グローバルサロン・本校主催の海外研修・高大連携講座等	30
本校プレゼンテーション	本校の授業または課外活動でのプレゼンテーション	51
本校フィールドワーク	課題探究のためのフィールドワーク	87
学外事業（イベント・研修）	本校が指定する研修及び他大学や他機関主催のイベント	15
学外大会・コンテスト	本校が指定する学外コンテストや大会（SGH甲子園等）	16
合 計		199

また、本年度から SGH の対象生徒が、昨年度からの一般進学クラスの第 2 学年文系に加えて一般進学クラスの第 3 学年文系に拡大された。

以下は本年度の集計結果である（表 2）。なお、国際クラス第 2・第 3 学年、一般進学クラスの第 3 学年文系は過去 2 年間、または 3 年間の通算の集計結果である。

表 2 グローバルパスポート集計結果(カッコ内は昨年度数値)

	人数	通算平均獲得マイル	目標マイル達成率	通算最高獲得マイル
国際クラス第 1 学年	23	2480.9 (2213.6)	91.3% (27.3%)	4652 (3200)
国際クラス第 2 学年	32	4821.1 (4654.1)	93.8% (100%)	7104 (7450)
国際クラス第 3 学年	37	7188.5 (5356.9)	100% (88.9%)	10154 (7850)
一般進学クラス第 2 学年	115	578.0 (665.9)	0% (0%)	1050 (1450)
一般進学クラス第 3 学年	8	1200.0	0%	1650

国際クラスについては、順調にマイル獲得がなされている。

3 学年とも獲得マイル数が多い生徒は、本校事業である「グローバルサロン」に定期的に参加し、海外研修や学外コンテストに積極的にチャレンジしている生徒、また、英語運用能力の向上を目指す観点からマイル配分の大きくしている資格試験の達成状況が優れている生徒である。

一方、一般進学クラスの第 2 学年の平均獲得マイルは、578.0 マイルで昨年を下回っている。これは、昨年度は 3 回実施したフィールドワークに変えて探究成果を日本語や英語でプレゼンテーションを行うための準備にその時間を振り向けたためである。もし、昨年同様のフィールドワークを行っていたら平均獲得マイルは 700 マイルを超えていたと推測できる。また、第 3 学年は SGH 活動の授業「課題探究」を選択した 8 名が対象である。第 2 学年修了時からの増加分は課題探究のためのフィールドワーク、プレゼンテーション、資格試験によるものがほとんどである。第 2・第 3 学年とも一般進学クラスの獲得マイル数が少ないのは、昨年度と同様であるが、一般進学クラスは探究活動を行う授業が「総合的な学習の時間」(2 単位)のみであること、部活動や進学対策等他の課外活動への参加率が高いことから、SGH 活動への参加が進まなかったことが挙げられる。

課 題： 新たに項目を 6 つに分けたことを受け、本校事業、学外事業、資格試験等 6 項目をバランス良く達成していくように指導していくことが必要である。そのためにはグローバルパスポートの集計間隔を短くすることが必要になる。しかし、マイルの集計作業は煩雑な作業であり、毎年次年度の課題として挙げてきた経緯がある。今後は、生徒自身の自己評価、グループによる協働作業という観点を取り入れることにより活動意欲の増進につながる運用方法を考えたい。

3(7) グローバルサロン

目 的： 平成 28 年度の研究報告書 p.42 を参照。

内 容： 全校生徒・保護者等を対象に土曜日に 2 時間程度実施（表 1）し、参加は任意である。年間を通じてグローバルに活躍する様々な分野の講師の現実に即した話を基に、具体的な課題について、世代・学年・コース等の枠を越えて討論する。

表 1 グローバルサロン実施一覧

回	日 時	講 師 ・ テ ー マ
1	4 月 22 日	濱田真輔氏（株式会社富士通）「次世代を担う人財となるには」
2	5 月 13 日	原田はる枝氏（NPO法人国際理解教育推進協議会理事）「ニューヨークに学ぶ国際性」
3	6 月 17 日	井澤友美氏（立命館大学国際関係学部助教）「パリ州における持続可能な観光開発への挑戦と課題」
4	7 月 8 日	河村たかし氏（名古屋市長）「訪れたくないマチNo.1からの大逆転～魂を入れるマチづくり～」
5	10 月 21 日	伊藤清道氏（中京大学国際英語学部客員教授）「アジアで儲ける方法を考える」
6	11 月 18 日	四方義啓氏（名古屋大学名誉教授）「インドから西へと流れる学問」
7	1 月 27 日	市野将行氏（グローバルカフェ名古屋代表）「愛知の多文化共生を生きる」



成 果： 参加人数については、本年度の国際クラス第 1 学年の生徒数が例年に比べて少なかったため減じているものの、合計数はほぼ例年通りである（表 2）。

表中「上記のクラス以外」に含まれる、特別進学クラスや保護者、他校生の参加が多いことから、普及がある程度進んでいるといえる。

国際クラスの生徒に対して、今後のグローバルサロンへの参加意欲についての調査を行い、5 段階の順序尺度を用いて加重平均値を出したところ、第 1 学年は 4.0、第 2 学年は 3.8 であった。第 2 学年の意欲について経年変化を見たところ、昨年度（1 年時）は 3.6 であった。また、昨年度の第 2 学年は 2.9 であった。つまり、本年度の第 2 学年は昨年度に比較して意欲が上昇しており、昨年度の同学年と比較しても意欲が高いことが分かった。第 2 学年の参加意欲に関する回答について、昨年度と本年度で比較した（図 1）ところ、「あまり高くない」「高くない」と答えた生徒数はあまり変わらないものの、「高い」を選んだ高群が増えている。

課 題： 課題は、SGH の準対象となっている一般進学クラス第 2 学年からの参加者がいないことである（表 2）。次年度は、グローバルサロンの情報をさらに増やし、担任をはじめとした教員の積極的な声掛けを行う。

表 2 年度・クラス別グローバルサロン参加者数

	平成 26 年	平成 27 年	平成 28 年	平成 29 年
国際第 1 学年	128	117	126	60
国際第 2 学年	65	71	42	86
国際第 3 学年	67	31	32	26
国際クラス合計	260	219	200	172
一般進学第 2 学年	0	0	3	0
上記クラス以外合計	30	69	197	99
合 計	290	288	397	271

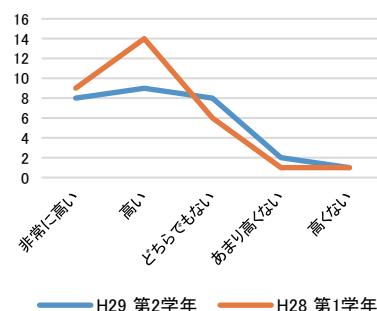


図 1 グローバルサロンへの参加意欲



3(8) グローバルリーダー講座

全校生徒を対象に実施することにより、探究学習のエッセンスを広く普及する取り組みである。世界の第一線で課題解決に取り組む講師による講座であるため、「本物」、「一流」に触れることによって、生涯に渡って課題発見・探究を進める素地を作るきっかけの場とする。

回	日 時	講 師 ・ テーマ
1	6月20日(火)	池上彰氏(名城大学教授)「2020年のニッポン, 高校生が今すべきこと」
2	11月22日(水)	桜井進氏(サイエンスナビゲーター)「数学の誕生とこれからの時代」

3(9) SGH 運営指導委員会の開催

① 第7回 SGH 運営指導委員会の開催

日 時: 平成29年11月19日(日) 12時30分～13時30分

場 所: 名城大学ナゴヤドームキャンパス 南館 3F DS301 講義室

出席者: 影戸誠委員長, 福島敏司委員, 武村學委員

陪 席: 後藤健太郎(株式会社AK 総研 代表取締役)

岩崎, 鈴木, 羽石(以上, 名城大学附属高等学校)

大武, 佐藤(以上, 名城大学大学教育開発センター(管理機関))

配布資料: 第6回 SGH 運営指導委員会議事要旨(案)(平成29年2月27日開催分)

【資料1】多文化セッション(愛知県庁×名城高校)

【資料2】グローバルフィールドワーク報告(行程表・SGH ブログ抜粋)

【審議事項】・SGH 運営指導委員会委員長の選任について

【報告事項】・多文化セッション(愛知県庁×名城高校)の事業報告

・グローバルフィールドワークの報告

・Meijo Global Festa 2017

・今後の事業展開について

② 第8回 SGH 運営指導委員会の開催

日 時: 平成30年2月23日(金) 12時00分～13時00分

場 所: 名城大学附属高等学校 1号館 会議室

出席者: 福島敏司委員

陪 席: 黒沢浩(南山大学教授), 後藤健太郎(株式会社AK 総研 代表取締役)

岩崎, 羽石, 岡(以上, 名城大学附属高等学校)

佐藤(以上, 名城大学大学教育開発センター(管理機関))

配布資料: 第7回 SGH 運営指導委員会議事要旨(案)(平成29年11月19日開催分)

【資料1】台湾研修(グローバルフィールドワーク)報告

【資料2】カナダ研修(グローバルアクション)報告

【資料3】平成29年度 SGH 管理機関等連絡会報告

【資料4】SGH 事業の検証に関する有識者会議の設置について

【報告事項】・カナダ研修(グローバルアクション)報告

・2017年度 SGH 全国高校生フォーラム報告

・平成30年度以降の SGH 事業

・平成29年度入学生ニュージーランド研修

3(10) 成果の公表・普及

研究発表会の開催（一般公開）

- ① 国際クラス第2学年「愛知県庁×名城高校♪多文化共生セッション」プラン発表
：平成29年5月26日（金）、6月16日（金）、7月14日（金）、9月8日（金）、10月6日（金）
内 容：愛知県多文化共生推進室と連携した新あいち多文化共生プランの提案
発 表：国際クラス第2学年29件（29名）
- ② 国際クラス第3学年課題研究発表会（日本語）：平成29年9月27日（水）
内 容：日本語での研究発表
発 表：国際クラス第3学年37件（37名）
- ③ 国際クラス第3学年課題研究発表会（英語）：平成29年10月26日（木）
内 容：英語での研究発表
発 表：国際クラス第3学年37件（37名）
- ④ Meijo Global Festa 2017：平成29年11月19日（日）
内 容：東海地区を中心とした課題研究に取り組む学校（生徒）による議論・発表
（詳細は前述「＜4＞3(5) Meijo Global Festa」を参照）
- ⑤ 生徒研究発表会：平成30年2月23日（金）
内 容：全校より選抜で研究発表
口頭発表：国際クラス第3学年課題研究2件（2名），
SGH 海外研修調査報告2件（第2学年2名，第1学年1名）
ポスター発表：国際クラス第3学年7件（7名）
一般進学クラス文系第2学年3件（9名）
SGH 海外研修調査報告1件（2名）

外部研究発表会への参加

- ① SGH 全国高校生フォーラム：平成29年11月25日（土）
内 容：SGH 指定校生徒による課題研究のポスター発表
ポスター発表：国際クラス第3学年1件（1名）
“Improving Japanese Teaching Environment for Foreign Children”
- ② 第3回高校生国際シンポジウム：平成30年1月31日（水）・2月1日（木）
内 容：課題研究に取り組む国内外の高校生による研究発表コンテスト
口頭発表：国際クラス第2学年1件（1名）：スライド発表部門最優秀賞受賞
「日本人住民の意識向上の提案」
- ③ SGH 甲子園：平成30年3月24日（土）
内 容：全国 SGH 課題研究発表
ポスター発表：国際クラス第2学年1名
ディスカッション：国際クラス第2学年2名

他校との交流・連絡・普及

主に以下の通り交流等を行った。表の右列には参加生徒の人数を記載した。

月 日	内 容	生徒数
5月2日(火)	愛知県立時習館高等学校「SSH・SGH成果発表会」	
6月2日(金)	京都府立嵯峨野高等学校「研究発表会」	
6月7日(水)	愛知県立旭丘高等学校「SG総合」講演講師派遣	
6月16日(金)	平成29年度第1回スーパーグローバルハイスクール連絡協議会・連絡会	
6月22日(木)～24日(土)	札幌日本大学高等学校「研究発表会」	
6月26日(月)	新潟県立国際情報高等学校「SGH報告会」	
8月7日(月)～10日(木)	愛知県立旭丘高等学校「高山グローバルサマーフェスタ」	14名
9月30日(土)	筑波大学附属高等学校「第3回SGH活動報告会」	
11月5日(日)	クエストエデュケーション 東海ミッションミーティング	9名
11月11日(土)	関西創価高等学校「SGH研究発表会」	
11月17日(金)～18日(土)	金沢大学附属高等学校「第4回SGH研究大会」	
11月19日(日)	Meijo Global Festa 2017	65名
11月25日(土)	SGH全国高校生フォーラム(パシフィコ横浜)	12名
11月28日(火)	熊本県立水俣高等学校の訪問受け入れ	
12月17日(日)	クエストエデュケーション 東海ジャム	10名
12月12日(火)	中部大学春日丘高等学校「SGH事業報告会並びに成果発表会」	
12月23日(土)	第2回関東・甲信越静岡地区スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会	
1月31日(水)～2月1日(木)	第3回高校生シンポジウム	4名
1月19日(金)	SGH管理機関等連絡会(筑波大学文京校舎)	
1月26日(金)	立命館宇治中学校・高等学校「SGH研究発表会」	
2月14日(水)	野田学園高等学校の訪問受け入れ：探究学習の手法等について普及活動	
3月24日(土)	関西学院大学「SGH甲子園」	8名

4 目標の進捗状況・成果・評価

本校の「研究開発目標」と「実践目標」に沿って記載する。

4(1) 【研究開発目標①】

高大の連携・協働を進め、グローバルリーダー養成のための各種プログラムを本校独自の取り組みである「グローバルパスポート」制度において 25 件以上実施する。

進捗状況・成果・評価

本目標における「各種プログラム」とは、グローバルパスポート制度における「本校事業」とする。(前述「<4> 3(6)グローバルパスポート」を参照)

本年度の本校事業としては 30 件のプログラムを実施し、目標に到達した。昨年度の 48 件からは減少しているように見えるが、昨年度は含まれていた「授業内での大学教授等による講座」を省いたことが大きな要因である。大学教授等の招聘は十分に普及しており、目標設定シート等にも記載しているため、本年度からは計上しないこととした。

表 1 グローバルパスポート本校事業内容

区 分	内 容	件 数
本校事業	グローバルサロン	7
	高大連携講座等	6
	Meijo Global Festa 等成果発表会	5
	海外研修 (NZ・台湾・オーストラリア・インドネシア・カナダ)	5
	名城大学主催事業	3
	海外交流 (台湾)	1
	公表・普及活動	4
合 計		30

各学年の参加者数は、国際クラスは、第 1 学年 (23 名) が延べ 187 名 (平均約 8 回)、第 2 学年 (32 名) が延べ 281 名 (平均約 9 回)、第 3 学年 (37 名) が延べ 111 名 (平均 3 回)、一般進学クラス第 2 学年 (115 名) が延べ 244 名 (平均約 2 回)、一般進学クラス第 3 学年 (8 名) が延べ 19 名 (平均約 2 回) であった。

昨年度の課題であった生徒の興味関心・探究活動や学習の程度の違いに対応するよう、グローバルサロンではより多様な講師を招聘した。(平成 28 年度の研究報告書 p.48 を参照) 生徒の参加意欲の喚起については、グローバルサロンの案内や Meijo Global Festa の生徒実行委員数、生徒研究発表会での発表枠を増やす等の対策を行った。

次年度以降の課題及び改善点

昨年度の課題の改善を図っているが、特に①学年・クラスのニーズを考慮したプログラムの開発、②その案内、については、さらなる改善が必要である。次年度指定 5 年目を迎えるに当たり、これまで実施した各プログラムの振り返りを行い、指定終了後も継続していくべきプログラムの精選と発展を行うことが必要であると考え。

4(2) 【研究開発目標②】

PBL におけるコンフリクト・レゾリューション、ジグソー学習、フリップトクラスルームの各教科における展開例の開発と定着を進める。

進捗状況・成果・評価

本年度は、校務分掌「教務部」で組織しているアクティブラーニングに関する研究部会を 16 回開催し、京都大学溝上慎一教授を迎えての教員研修会を開催した。後日、溝上教授を迎えて研究授業を実施した。

また、本年度は普通科の各コースで実施されている探究的な学習を行う授業の報告をまとめた「探究的な学習報告 2017」が出された。本校では、探究的な学習を主に行う学校設定教科のある普通科国際クラス、普通科スーパーサイエンスクラス、総合学科がその定着や深化を進めてきたが、最も生徒数の多い普通科一般進学クラスでは遅れがちとなっていたため、一般進学での取り組みをまとめることは、定着の第一歩といえる。

PBL を基とした授業開発も探究的な学習を推進してきた教員を中心に、「総合的な学習の時間」や学校設定教科目だけでなく、所属教科の授業においても進められている。(表 1)。本年度の本校における研究授業及び公開授業は 47 件であったが、タイのプリンセスチュラボーンカレッジトラン校での研究授業も実施した。また、探究的な学習を推進するなかで日常的に授業見学をし合うことが増えている。

さらに昨年度の課題を受けて、いくつかの授業では探究的な学習におけるガイドラインを作成し、それを基に授業運営を行うとともに、取り組みを共有することを継続した。

表 1 総合的な学習の時間・学校設定教科以外でのアクティブラーニングの実践例

教 科	内 容
国 語	図書館での資料探究 文章を作成させ、グループ学習 各単元におけるグループディスカッション・プレゼンテーション
社 会	政治経済分野の PBL (グループ討議・発表) 近代思想等、倫理的分野におけるジグソー学習 国際紛争・国際経済についての PBL
数 学	和算についての PBL (英語科と連携) 各単元における反転学習
理 科	生態系・高分子化合物についてのジグソー学習 問題演習におけるジグソー学習
英 語	和算についての PBL (数学科と連携) 英字新聞を用いたテーマ学習 各単元におけるジグソー学習・ディスカッション
体 育	社会と健康・交通事故・応急手当等についてのグループワーク 医薬品とその活用等についてのジグソー学習
家 庭	調理実習におけるグループワーク

次年度以降の課題及び改善点

①取り組む教員の偏り、②取り組みの共有、の 2 点が昨年の課題であり、(平成 28 年度の研究報告書 p.50 を参照) その改善を図っているが、集団の大きなクラスでの展開は引き続き困難であり、組織的な授業開発の段階には至っていない。

各教科の専任率を上げるとともに、教員用のガイドラインの作成・精査を継続することが必要であろう。

4(3) 【実践目標①】

探究型学習を通して、自らネットワークを構築し、協働して問題解決に向かう、スキルとマインドセットを育成する。

進捗状況・成果・評価

スキルとマインドセットの育成手法として探究型学習を用いるが、「探究型授業」に加えて、「海外研修」、「フィールドワーク」を探究型学習とする。(前述「＜4＞3(1)事業の評価」 pp.13－14 を参照)

本年度の探究型授業は、国際クラスでは第1学年で「多文化共生」(2単位)、第2学年では「国際教養」(4単位)や「課題探究」(2単位)、第3学年では「課題探究」(4単位)を行った。さらに、国際クラスでは国語、公民、英語等においても探究型の授業を積極的に実施している。一方、一般進学クラスは、第1学年で4クラス合同の「探究基礎」(1単位)、第2学年で文系の生徒のみ「グローバル概論」(2単位)、第3学年で「課題探究」(2単位)を履修した。

これらの探究学習の効果を検証するために、SGT及び各因子の向上実感調査等を行った。

SGTの結果、国際クラスにおいては、入学時から各項目とも高い値を出すようになってきている。第1・第2学年ではICT活用能力を除いて顕著な変化は見られないが、一般クラスや国際クラス第3学年の1年時と比較すると、どの因子においても入学時の値が高い。これは、PDCAを活用したプログラムの改善にもとづく本校のSGH事業が、国際クラスには早くから浸透してきたということに他ならない。

各因子の平均値は、国際クラスは3.8～4.3、一般クラスは3.6～3.9であり、昨年度よりもそれぞれ0.2～0.3ポイント程度上昇している。

以上から、国際クラスを中心に実施している探究型学習は、より洗練されつつあるとともに、そのエッセンスが準対象である一般進学に普及されつつあることが確認される。

以下にSGT結果を記載する。(図1～図6にある凡例において、春は4月、冬は1月を指す)

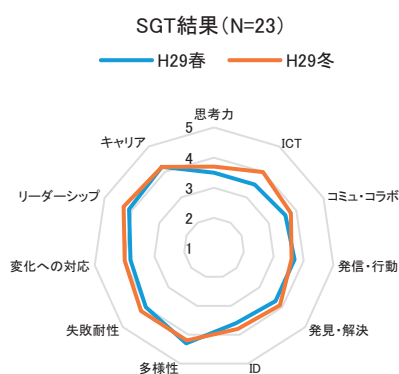


図1 国際クラス第1学年 各因子の変化

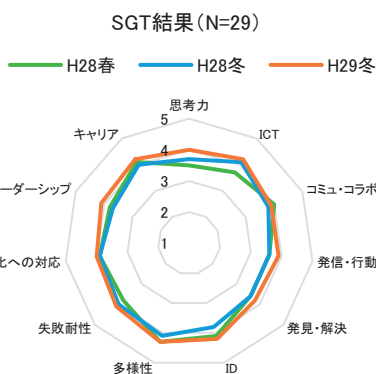


図2 国際クラス第2学年各因子の変化

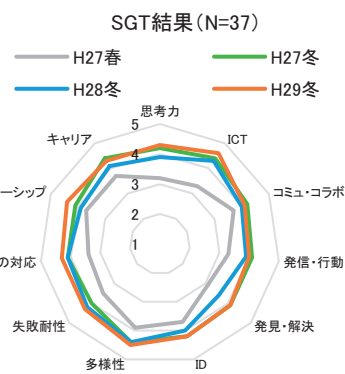


図3 国際クラス第3学年各因子の変化

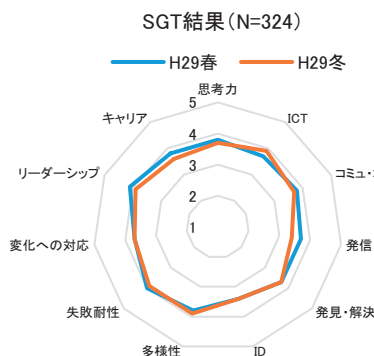


図4 一般進学クラス第1学年各因子の変化

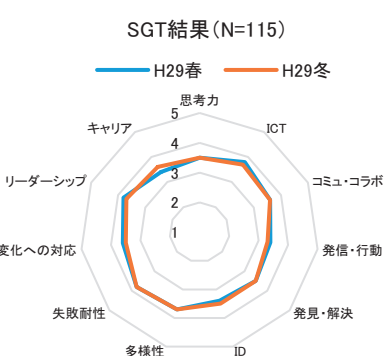


図5 一般進学クラス文系第2学年各因子の変化

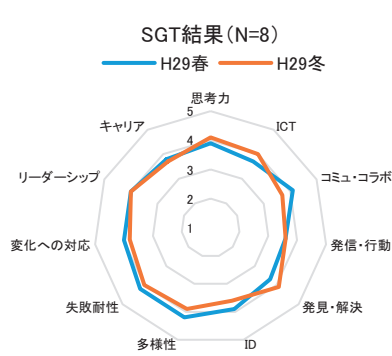


図6 一般進学クラス文系第3学年
課題探究選択者 各因子の変化

以下に各対象生の結果をまとめる

【主対象生:国際クラス第1学年】

- ① 1月時点で、11因子中6因子の平均が4.0を超え、全ての平均は4.0ポイントである。4月の結果から0.2ポイント上昇しているが、4月時点からかなり高いポイントといえる。
- ② 4月の結果と比較してt検定を行うと、「ICT (+0.5)」で有意差が認められた。(p<0.05)これは情報教科と連携し、グローバル教科「グローバルプロジェクトスタディ」の成果だと考えられる。

【主対象生:国際クラス第2学年】

- ① 昨年度の1月から各因子の平均は、0.3ポイント上昇しており、全ての因子が上昇している。t検定を行うと、「思考力 (+0.3)」,「アイデンティティ (+0.4)」,「リーダーシップ (+0.4)」で有意差が認められる (p<0.05)。第2学年では新たに授業「課題探究」が開始され、海外や国内でのフィールドワークの機会が増えるとともにMeijo Global Festaでも主体の学年として活躍したことが、大きく影響していると考えられる。
- ② 入学時から比較すると、平均して0.2ポイント上昇しており、「コミュ・コラボ (-0.1)」を除いた全ての因子の値が向上しているが、有意差が認められたのは「思考力 (+0.5)」,「ICT (+0.5)」,「失敗耐性 (+0.3)」の因子であった (p<0.05)。

【主対象生:国際クラス第3学年】

- ① 1月の各因子の平均は4.3ポイントである。また、昨年1月の結果と比較すると全ての因子のポイントが上昇している。t検定を行うと、「思考力 (+0.4)」,「ICT活用能力 (+0.3)」,「発見・解決 (+0.5)」,「リーダーシップ (+0.5)」において有意差が認められた。(p<0.05)
- ② 入学時から比較すると、平均して0.8ポイント上昇しており、すべての因子で有意差が見られたが、特に「思考力 (+1.1)」,「ICT (+1.3)」,「発見・解決 (+1.0)」が大きく上昇した。これは、探究型学習の取り組みの成果といえる。

【準対象生:一般進学クラス第1学年】

- ① 本年度の4月と1月の各因子の平均はそれぞれ3.8ポイント,3.7ポイントである。これは昨年度、一昨年度の一般進学クラス第1学年の値と比較するとそれぞれ0.1ポイント,0.3ポイント高い。(平成28年度の研究報告書 pp.51-55を参照)
- ② 本年度の4月の結果と比較すると各因子が平均0.1ポイント下降している。向上が見られる因子で有意差が認められたのは、「ICT (+0.2)」,「多様性 (+0.1)」であった(p<0.05)が、その他の因子の値はすべて下降している。「探究基礎」は1単位での実施であるため、様々な因子において向上実感をもつほどには深化できていなかったといえる。

【準対象生:一般進学クラス第2学年】

- ① 本年度の4月と1月の各因子の平均はともに3.6ポイントで、各因子の平均では変化が見られない。
- ② 昨年度の第2学年の1月と比較すると、各因子の平均は、0.1ポイント上昇した。(平成28年度の研究報告書pp.51-55を参照)SGHの取り組みが普及していると考えられる。

【準対象生:一般進学クラス第3学年】

- ① 本年度の4月と1月の各因子の平均はともに3.9ポイントであり、t検定による有意差は認められなかった。

探究型学習の成果を検証するため、スキルとマインドセットの各因子における向上実感を「強く感じる」・「感じる」と答えた国際クラス第2・第3学年にその要因を聞いた。全ての因子において、探究型授業が向上実感の要因になったと答える生徒が多い(図7,8)。さらに「探究型授業」に合わせて「海外研修」,「フィールドワーク」も「探究型学習」に含まれると考えるが、それらをすべて合わせるとおよそどの因子においても半数以上を占めている。このことから、

全てのスキルとマインドセットの向上実感に「探究型学習」が大きく影響していることが検証された。

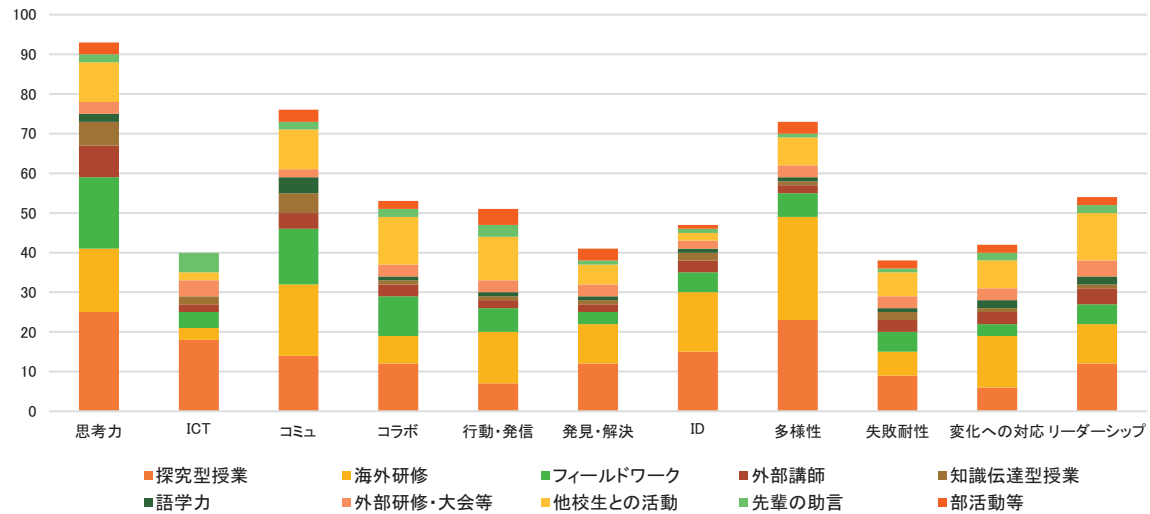


図 7 国際クラス第 2 学年向上実感の要因

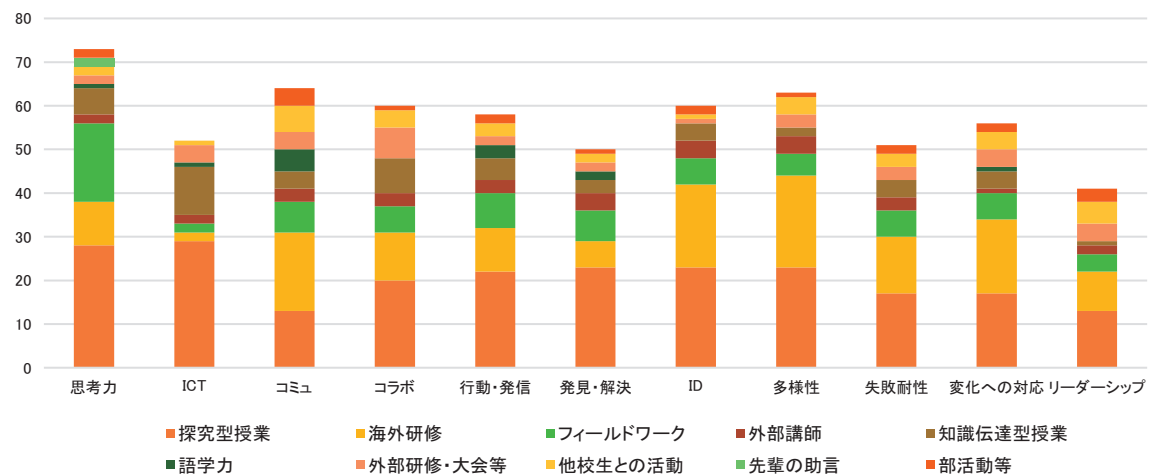


図 8 国際クラス第 3 学年向上実感の要因

また、昨年度の課題に記載した、国際クラス第 1 学年で SGT ポイントの低下が有意であった「アイデンティティ」因子の「将来への希望」については、中学時代に抱いた夢と高校生活が始まってぶつかる壁との葛藤が生じていると推察されたため、本年度は様々な活動や学習の目的と将来との結びつきを意識化させるとともに、社会との接点を増やすことによってポイントが上昇し、改善が見られた。

SGH 事業の根幹に関わる内容である本項目が、昨年度の追跡調査とそれに基づいた指導によって、ポイントが回復した点に今年の成果が集約される。

次年度以降の課題及び改善点

昨年度の課題に引き続き、スキルとマインドセットの各因子が意味する具体的な内容の共通理解を進め、目指す資質と学習内容の具体化・構造化を進める。

4(4) 【実践目標②】

国内と海外でのフィールドワークを課題研究論文完成までに4回以上実施し、それらの実践的活動を通して、ローカルとグローバルを往還する視座を獲得させる。

進捗状況・成果・評価

本年度、課題研究論文作成を行ったのは、国際クラス第2学年(29名)、国際クラス第3学年(37名)、一般進学クラス文系第3学年の選択者(8名)であり、総合的な学習の時間の「課題探究」にて実施した。該当科目に関わる教員は総勢10名であり、ゼミ形式で授業を進行した。生徒は各自の研究課題に基づいた調査を行うため、適宜課外活動の時間等を利用して企業や団体等に赴いた。(前述「<4>3(4) ローカルフィールドワーク」を参照)

課題研究論文完成までに4回以上のフィールドワークをするという目標においては、国際クラス第2・第3学年は100%の達成率であった。一般進学クラス第3学年では2年時に全員が3回のフィールドワークを実施しているが、今年度の課題研究に関わるフィールドワークは全員が行うことができなかったため、達成率は86.5%である。今年度実施したものに限定すると、国際クラス3学年で平均して5.5回の実施となった。

複数のクラスが同時期に課題研究に取り組むこととなり、「課題探究」のゼミを基準に、学年やクラスをまたいで、テーマの近い生徒同士がともにフィールドワークに行くケースが見られ、フィールドワーク実施後には互いの研究について検討し合うような場面も見られた。

また、海外フィールドワークでは、現地の調査結果から愛知県産業を分析する等、「ローカルとグローバルを往還する視座を獲得」するべく学習を進めた。

さらに、「愛知県庁×名城高校♪多文化共生セッション」での学習を基に、「在名古屋ブラジル領事館」、「豊田市国際交流協会」、「名古屋国際センター」等でフィールドワークを行った生徒は、第3回高校生国際シンポジウムのプレゼンテーション発表部門(国際問題・環境分野)において最優秀賞を受賞した。(後述「<4>4(5)【実践目標③】」を参照)

「フィールドワークによるローカルとグローバルを往還する視座の獲得」を定量的に捉える手立てとして、ローカルとグローバルを往還する視座の獲得に欠かせない「思考力」因子に注目し、その因子に向上実感を持つ生徒にその回答を導くこととなった要因を尋ねた。その結果、探究型授業の次にフィールドワークが多く(図1)、フィールドワークに関わる一連の学習活動が論理的・批判的思考力の育成に寄与していると考えられる。

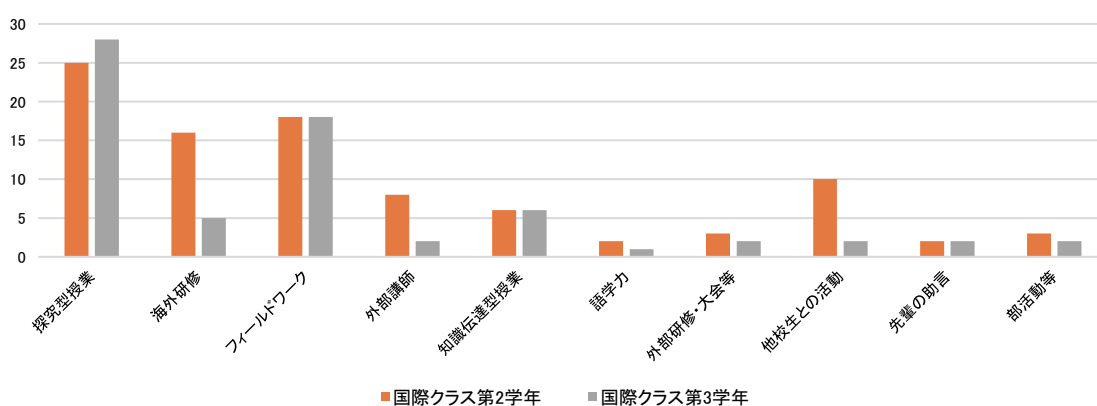


図1 論理的・批判的思考力の向上に影響したと考える要素(国際クラス)

次年度以降の課題及び改善点

一般進学クラスにおけるフィールドワークへの参加、意欲ともに低い状況にあるのが引き続きの課題である。次年度に向けて、受け入れ人数・研究課題との関連等、多様なフィールドワーク先の検討・開発を進める。

4(5) 【実践目標③】

国内外の研修、大会及び社会活動に年間 3 回以上参加させる。

進捗状況・成果・評価

国内外の研修、大会及び社会活動に年間 3 回以上参加した生徒の割合は、国際クラス全体で 87.0%であり、国際クラス第 1 学年及び第 2 学年については 100%達成できた（表 1）。昨年度まではニュージーランド研修等を含めていたが、本年度より全員参加の研修は除いて計上した。

表 1 実践目標③の結果

区 分	応募・参加数	1 人あたりの平均参加数	目標達成割合
国際クラス第 1 学年	256	11.1	100%
国際クラス第 2 学年	347	10.8	100%
国際クラス第 3 学年	118	3.2	56.8%
一般進学クラス第 2 学年	113	1.0	0.9%
一般進学クラス第 3 学年	0	0	0%

国際クラスにおいては、第 3 学年の達成率が低いですが、2 年時は 100%であった。進路を決定する時期が近づき、活動がある程度制限されたことが推測できる。

一般進学クラスにおいては、第 2 学年では活動目標を授業内のポスター発表としていたこと、第 3 学年は本年度から開講された「課題探究」を選択した 8 人のみであり、授業外での活動が定着していなかったことが達成度の低さにつながったと考える。しかしながら、大会参加への意欲は喚起しており、校内選考で漏れたものの SGH 甲子園に向けて応募することができた。

以下の表 2 に主な参加先と参加数、表彰について記載する。

表 2 国内外の研修・大会・社会活動と参加状況（表彰欄のカッコ内は所属クラス）

区分	内 容	参加数	表 彰
研修	グローバルサロン（全 7 回）	288	
	次世代リーダー講座（全 4 回）	49	
	カナダ研修	6	
	オーストラリア海外研修	30	
	高山グローバルサマーフェスタ 主催：旭丘高等学校	14	
	クエストエデュケーション 東海ミッションミーティング	9	
	クエストエデュケーション 東海ジャム	10	
	移民政策学会 2017 冬季大会	6	
	国連を職場として 主催：国連地域開発センター	3	
	多文化共生フォーラムあいち 2017 主催：愛知県	4	
	実践！グローバルユース塾 主催：名古屋国際センター	9	
大会	Meijo Global Festa 2017	86	
	SGH 全国高校生フォーラム 主催：文科省・筑波大学	12	
	SGH 甲子園 主催：関西学院大学・大阪大学・大阪教育大学	3	ポスター発表 安藤(国際) ディスカッション 岩田 堀 (国際)
	NIE 全国大会 主催：日本新聞協会	49	
	高校生国際シンポジウム 主催：Glocal Academy	4	スライド発表（国際問題・環境） 最優秀賞 山室美南(国際)
	クエストエカップ 2018 主催：クエストカップ実行委員会・教育と探求社 後援：経産省・埼玉県教育委員会・東京都教育委員会	23	
	国際協力中学校・高校生エッセイコンテスト 主催：JICA	51	
	IIBC エッセイコンテスト 主催：国際ビジネスコミュニケーション協会	47	学校奨励賞
	株の力 主催：三菱 UFJ モルガンスタンレー証券・教育と探求社	20	優秀賞 新井 梅田 鬼塚 永井 畑中 花井(国際)
	新聞切り抜き作品コンクール 主催：中日新聞社	383	入選 山本さな子（一般）
	国際ユース作文コンテスト 主催：五井平和財団	55	
	高校生英語スピーチコンテスト 主催：愛知大学国際コミュニケーション学部	10	3 位入賞 土屋優美(国際)
	高校生英語エッセイコンテスト 主催：関西学院大学・読売新聞・ジャパンニュース	13	努力賞 本郷愛紗(国際)
	日台文化交流青少年スカラシップ 主催：日本工業新聞社・産経新聞社	16	
	中日新聞「発言」へ投稿	113	
	The Global Enterprise Challenge	5	
社会活動	日本語支援活動	1	
	その他ボランティア	2	

本年度の成果の一つとして、これまで外部大会への応募は国際クラス第3学年が中心となっていたが、課題研究論文の執筆時期を早めたことで、第2学年でもそれが可能となり、結果を残すことができた。また、昨年の課題を踏まえて、研修や大会の参加後は校内で報告会を行う等、今後の探究活動に生かす仕組みを作った。

今後の研修や大会への参加意欲を聞いたところ、以下の結果となった(図1, 2)。外部研修への参加意欲が「非常に高い」または「高い」と答えた生徒の割合は、国際クラス第1学年は69.6%、第2学年が62.0%、一般進学クラス第2学年では10.5%、同様に外部大会への参加意欲は順に56.5%、58.6%、7.4%となった。ここでも国際クラスは高い値を示しているが、一般進学クラスは低い傾向が見られた。

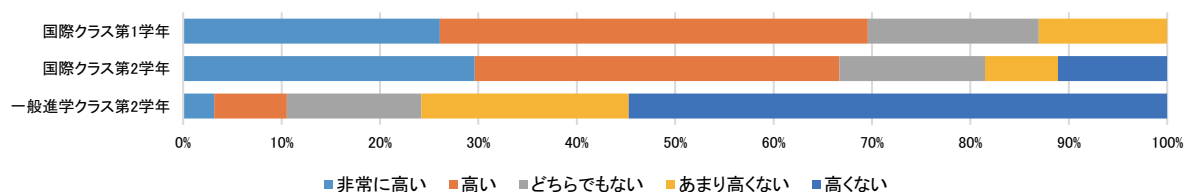


図1 今後の外部研修へ参加意欲

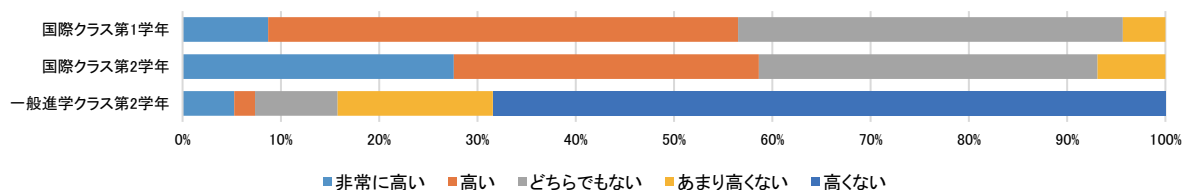


図2 今後の外部大会へ参加意欲

次年度以降の課題及び改善点

国際クラスでは、外部の研修や大会への参加の意義や効果を意識化させて課題探究を進めることで、その価値が共有されてきている。一般進学クラスの外部研修・大会への参加意欲の低さ・参加回数の少なさは課題であるが、国際クラスでの手法を活用しつつ、外部大会への参加を年間の授業目標の1つとして設定することで、意欲や研究の質が高められるのではないかと考えられる。

4(6) 【実践目標④】

プレゼンテーションを、国際クラスの生徒は年間 12 回以上実施する。

進捗状況・成果・評価

全員が目標を達成した（表 1）。また、表 1 に記載されている全員が行うプレゼンテーションの他に、代表者のみが発表するものも多く実施することができた。

表 1 プレゼンテーション回数

学年	本年度の回数	昨年度の回数	実施授業（回数）
1	14	12	総合的な学習の時間における「多文化共生」(5) グローバル教科「グローバルプロジェクトスタディ」(4)・「English Presentation」(5)
2	14	15	総合的な学習の時間における「課題研究」(3) グローバル教科「国際教養」(5)・「English Presentation」(5) 公民教科「政治経済」(1)
3	17	13	総合的な学習の時間における「課題探究（日本語・英語）」(2), グローバル教科「English Presentation」(3), 「ホームルーム」(10), 公民教科「公民演習」(2)

「English Presentation」では、昨年度と同様に、第 1 学年はプレゼンテーションの基本技能を段階的に指導し、順調に習得した様子が見受けられた。様々なテーマについて、序論・本論・結論の構成を守ってまとめることを通し、自分の意見を相手にわかりやすく伝えるための技能を身につけた。第 2 学年は、即時的な英語での発信力をつけるべく、質疑応答を重視した結果、臨機応変に対応することに慣れてきた様子が伺えた。第 3 学年は昨年度に比較してディベートやプレゼンテーションのアブストラクトを英語で作成する等プレゼンテーション以外の時間を充実させた。

次年度以降のプレゼンテーションに対する意欲については、第 1 学年は 90%以上が、第 2 学年は約 80%が「非常に高い」、「高い」と回答した。この背景にはプレゼンテーション力の向上実感と学年を越えた発表の視聴機会がある。上級生の発表を視聴して、「先輩のように発表できるようになりたい」と憧れが意欲を高める様子や互いの発表を検討する様子が見られた。

本年度の第 3 学年は、ホームルームでのプレゼンテーションが多かったが、第 22 回 NIE 全国大会に公開授業の形式で参加したためである。3 年間の NIE 活動の集大成として参加し、その事前・事後のホームルームでプレゼンテーションを体系的に行った。NIE 活動は様々な学習に取り入れられており、第 1 学年の「探究基礎」及び「多文化共生」の授業や課題研究活動でも活用されている。

昨年度の課題として、校外での発表機会に参加しやすい状況の整備があったが、課題研究の完成を早め、参加しやすい状況をつくることができた。

第 3 学年の生徒を対象に 3 年間でついた力について書かせたところ、多くの生徒が人前で自信をもって発表することができるようになったと答えていることから、自己肯定感の向上にも寄与していると考えられる。

次年度以降の課題及び改善点

英語でのプレゼンテーションにおいては、昨年度から比較すると即時的に英語で発信することが出来る生徒も増えたが、引き続き、継続して指導計画・内容の改善をする。

また、プレゼンテーションのスキルだけではなく、その質の向上が求められる。知識の習得とともに論理的・批判的思考力の向上に向けて、引き続き段階的・体系的に指導を行う。

4(7) 【実践目標⑤】

卒業時における CEFR の B2 レベル到達率を、国際クラスの生徒は 100%とする。

進捗状況・成果・評価

実用英語技能検定での準 1 級、TOEIC Listening & Reading (以下、L&R) 785 点以上で CEFR の B2 レベルと読み替える。(平成 28 年度の研究報告書 p.61 を参照)

結果として、第 3 学年では実用英語技能検定で見ると 43% が準 1 級を合格 (図 1)、TOEIC L&R では 8% が 785 点を取得 (図 2)。昨年度と比較すると、実用英語技能検定の準 1 級取得者は 23% 増加し、TOEIC L&R の 785 点取得者は 11% 減少した。TOEIC の 785 点取得者の割合が下がっているが、この背景には大学入試改革に向けて実用英語技能検定の取得を重視したことがあげられる。同時に、これまで 4 技能を重視して指導していた成果が、実用英語技能検定の配点変更により、より明確になった。

また、指定当時の B1、B2 の指標であった実用英語技能検定 2 級で見ると、97% が達成しており (図 1)、目標をおおむね達成している。

なお、TOEIC でもクラス平均得点の推移を見ると、第 1 学年前期の 345 点から第 3 学年後期の 630 点へと 285 点伸びた。

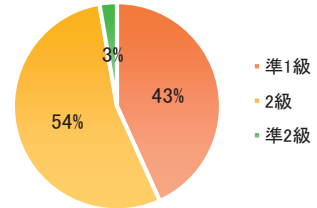


図 1 国際クラス第 3 学年
実用英語技能検定取得率

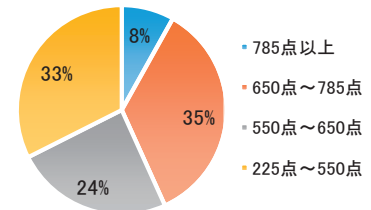


図 2 国際クラス第 3 学年
TOEIC L&R スコア

次年度以降の課題及び改善点

CEFR-J 等を参考にし、授業内で使用する能力を中心に教員が作成した Can Do リストの B2 レベル (表 1) をもとに、生徒の様子を見ると、「話すこと (発表)」「書くこと」「読むこと」「聞くこと」はおおむねの生徒が達成しているが即時的な発話が求められる「話すこと (やり取り)」は達成していない生徒が見受けられた。あらかじめ話す内容を準備している発表や、情報を準備しているディベートは出来ていたため、時事問題や社会課題についての知識や用語が定着していないと話すことが難しい様子が伺えた。次年度以降、即時的に英語で時事問題や社会問題等について話すことが出来るようになるために、グローバル科目「国際教養」等の授業で、英語で時事問題や社会問題等に触れる時間を増やすことを検討する。

表 1 Can Do リスト B2 レベル (下段は対応する科目名)

話すこと (やり取り)	話すこと (発表)	聞くこと	読むこと	書くこと
時事問題や社会問題等について、即時的に自分の考えを論理的に述べるができる。	時事問題や社会課題等について、客観的事実と自分の考えを用い、聞き手に伝わるように工夫しながら、15 分程度の発表をすることができる。また、質疑応答では即時的に質問者の質問に答えることができる。	時事問題等、幅広く社会に関係した内容についての情報や説明を聞いて、要点を正確に理解することができる。英語母語話者の演説を聞き取り、内容を理解することができる。	論理性のある説明文等を中心に専門的な分野の英文を初見で読んで、大筋の内容を正しく理解できる。自分の必要とする情報を英文の中から短い時間で的確に探さることができる。	時事問題等幅広く社会に関係した内容について自分の考えを論理的な段落構成を意識しながら、150 語程度で書くことができる。
English resenation, コミュニケーション英語Ⅱ 英語演習	English Presentation	English Presentation コミュニケーション英語Ⅱ 英語演習	コミュニケーション英語Ⅱ 英語演習	コミュニケーション英語Ⅱ 英語演習

Can Do リストについては、生徒に自己評価をさせたが、生徒の実態と生徒の自己評価が異なることが多かった。今後より良いものになるように内容を精査し、生徒の自己評価に向けてもさらなる活用を進める。

4(8) 【実践目標⑥】

国際化を進める国内や海外の大学等，課題研究を生かした研究ができる大学へ進学する生徒を育成する。

進捗状況・成果・評価

国際クラス第3学年においては，スーパーグローバル大学創成支援事業の採択校(以下，SGU)である，早稲田大学，上智大学，明治大学，立教大学，立命館大学，関西学院大学等への進学が決定している。その他，国際化を推進する大学や課題研究をさらに発展させることのできる大学の学部・学科へ進学を決定してきている。(本稿作成時点での可否・進学の結果は不明)

在校生においては，「グローバルな大学への進学意欲」と「グローバルなキャリア形成への意欲」について調査を行った。「探究を深めることのできるグローバルな大学」への進学意欲が高い(「非常に高い」と「高い」)生徒は，第3学年で76%，第2学年では83%，第1学年で77%であり，どの学年も高い値を示している(図1)。

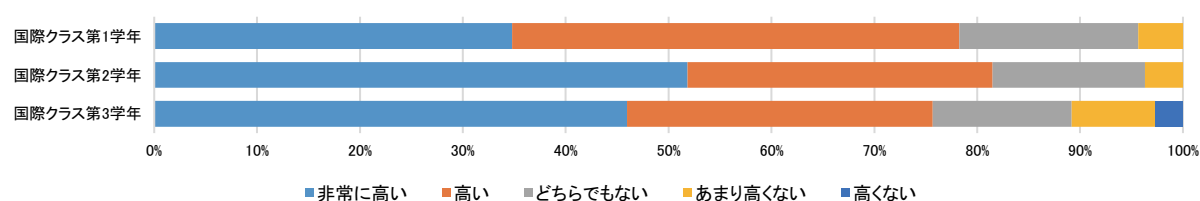


図1 探究を深めることのできるグローバルな大学への進学意欲(国際クラス)

「グローバルなキャリア形成への意欲」は，学年が進行するにつれて高くなっていることがわかる。意欲の高い生徒(「非常に高い」と「高い」)は，第3学年89%，第2学年82%，第1学年61%であった(図2)。

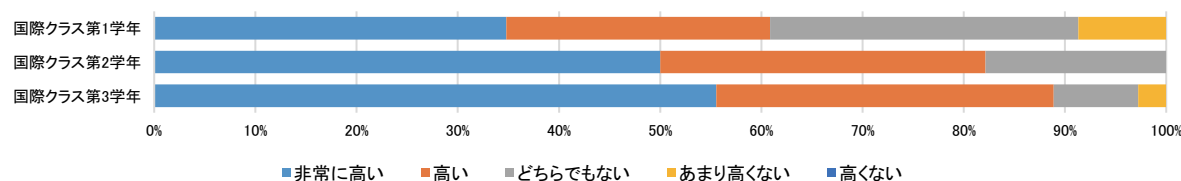


図2 グローバルなキャリア形成への意欲(国際クラス)

両質問の結果を比較すると，第3学年では若干ではあるがグローバルなキャリア形成の意欲にくらべてグローバルな大学への進学意欲が低い。大学受験に不安を抱き，グローバルな大学への進学はできないかもしれないが，グローバルなキャリアは築きたいといった葛藤が推測される。逆に第1学年は，グローバルなキャリア形成の意欲よりもグローバルな大学への進学意欲の方が高い。ここからは，第1学年が将来については漠然としている一方で，目指す大学への進学を目標としている様子が推測できる。

これらの意欲は何が喚起させているのかを調べるために，両質問において高群の回答を選択した生徒に，その回答を導くことになったと考える要素を聞いた。結果，「グローバルな大学への進学意欲」において全学年に共通して高かったのは「探究型授業」と「語学力」，「フィールドワーク」であり，第2・3学年では「海外研修」，第1学年では「外部講師」も高い(図3)。「グローバルなキャリア形成の意欲」においては，第2・3学年では「探究型授業」と「海外研修」の値が高く，第1学年では前の質問の結果と同様「外部講師」の値が高い(図4)。

「海外研修」を選択する第1学年が少ないのは，第1学年のほとんどの生徒が調査時点では海外研修に行っていないためである。一方，第2学年以上はほぼ2回以上の経験をしており，研修内容と結びついた探究型授業も多く実施しているため，影響を受けた生徒が多いことが推測できる。

両質問の回答を比較すると、グローバルな大学への進学意欲に影響する要素は、グローバルなキャリア形成への意欲に比べて、「フィールドワーク」と「語学力」の値が高い。「フィールドワーク」の経験を元に大学での研究を具体化したり、英語力の伸長によって進学先を具体化したりする様子が推測できる。つまり、グローバルな大学への進学意欲は、探究型学習での学びとともに実社会との接点と英語力の向上が必要であることがうかがえる。

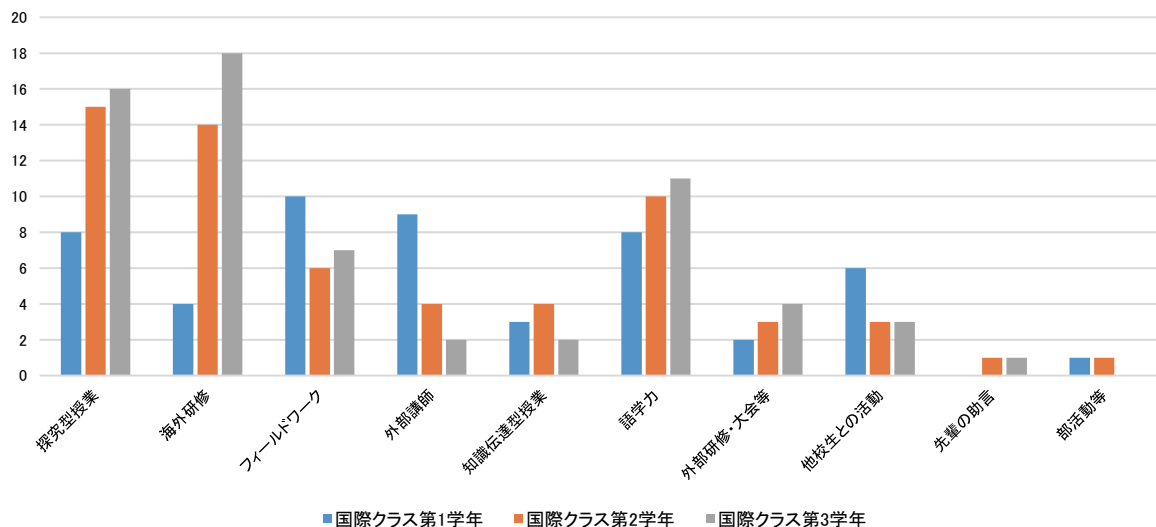


図3 探究を深めることのできるグローバルな大学に進学する意欲を高めた要素(国際クラス)

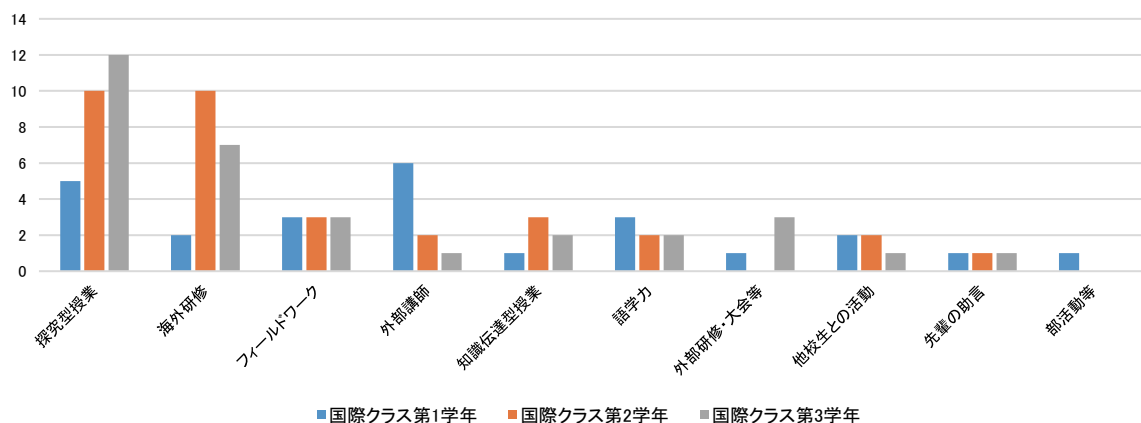


図4 グローバルなキャリア形成への意欲を高めた要素

次年度以降の課題及び改善点

SGUをはじめとした国際化を進める大学は関東・関西に多く、海外大学も含めて、それらの大学への進学は経済的に叶わないケースも少なくない。そのため中部地方の大学が、よりグローバル化に力を入れていくことが求められる。本校のSGH事業を通して、この地方の大学に働きかけることも必要であり、Meijo Global Festa等を広く活用したい。

また、グローバルな大学への進学意欲には、探究型学習での学びと実社会との接点、英語力の伸長が欠かせない。そのため、昨年度と同様、①SGUを始めとした国際化を進める大学についての情報をアナウンスし、それらの大学で実施されるイベント等への参加を積極的に促すこと、②実社会との接点を「探究型学習」を生かしつつ、英語の4技能を伸ばすこと、が今後の課題といえる。